

連続公開シンポジウム

廿一世紀の東方学

第2回

東方学と国際協力

京都大学人文科学研究所

2002年（平成14年）3月

開 会 の 辞

人文科学研究所所長 阪上 孝

司会（高田時雄） それでは、ただ今から連続公開シンポジウム「21世紀の東方学」の第2回目を始めさせていただきます。

きょうは土曜日ということで、お休みにもかかわらずたくさんの方に来ていただきましてありがとうございます。

それでは、きょうの第2回目は「東方学と国際協力」という課題で討論をさせていただきたいと考えております。

開会に先立ちまして、主催者側であります私も京都大学人文科学研究所のほうから阪上孝所長にごあいさつをいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

阪上 本日は、師走の何かとお忙しいときにもかかわらず、またお寒いなかを、「21世紀の東方学」のシンポジウムに多数ご参加いただきありがとうございます。お礼申し上げます。

また、京都大学総長長尾先生には、このシンポジウム開催について一方ならぬご尽力をいただき、その上、本日は、最近の大学事情のなかでことのほかご多忙であるにもかかわらず、このシンポジウムにご臨席いただきお言葉をいただけるとのことで感謝しております。長尾先生に心よりお礼申し上げます。

この連続シンポジウムの第2回「東方学と国際協力」を開催するにあたり、一言ご挨拶申し上げます。

10月16日に第1回のシンポジウムが開催されたさいに、国際協力の問題をもっと論じるべきだという声がたくさん出たとうかがっております。国際協力というテーマは、21世紀の学術を進展させる上でまことに重要なテーマであります。

私は中国学についてははなはだ疎いのですが、宮崎市定先生のお書きになったもの、といってもエッセイや啓蒙書ですが、先生の書かれたものを読みますと、国際的な切磋琢磨と世界的視点が強く感じられます。京都大学の東洋史学の育ての親である桑原隲蔵博士について、次のように書いておられます。「博士は従来の封鎖的な漢学者の立場からするシナ史にあきたらず、世界的な視野から中国の歴史を見直そうとした。そのためには中国を説明するに中国をもってするだけでは不十分であり、外国をもって中国を説明することが



必要になってくる。そこで博士の東洋史研究には、東西の交通、その文化交渉、彼我相互の認識などの問題が何物にもまして重要視される。そうした上で再び中国内部の問題に目を転ずると、従来看過されがちであった中国史発展の実相が明瞭に把握されるようになる。」桑原博士についていわれたこの言葉は、宮崎先生のお仕事にもそのまま当てはまると思います。じっさい、宮崎先生はパリの東洋語学校に留学され、つねに世界史のなかのアジア史を念頭において多くの業績を残されました。世界的視点は国際協力の第一条件とあってよいでしょう。

中国研究における国際協力の進展について、忘れてはならないのは、井上清先生の事績であります。残念なことに井上先生は先日お亡くなりになりましたが、先生は日中国交回復以前から中国学界と親交を深めておられ、先生のご尽力で1973年3月に河野健二所長を団長とし8人の団員からなる「京都大学人文科学研究所学術友好代表団」が中国を訪問し、研究者の相互交流の道を開き、その翌年11月に北京大学社会科学友好代表団が京都大学の招請に応じて京都大学を訪問しました。私は当時人文科学研究所の助手でありましたが、法経教室で開かれた学術講演会のことを覚えております。人文科学研究所は日中学術交流の先陣を切ったのであります。その後、1981年に設置された外国人客員部門により、人文科学研究所で研究をされた中国の研究者は着実に増加し、中国の研究者との共同研究も着実に前進しております。友好的な関係が国際協力のもう一つの条件であることは、あらためていうまでもありません。

私はフランスの思想史を研究しておりますので、少しそちらに引きつけて申しますと、競争を意味する言葉として *concurrency* と *émulation* という二つの言葉がございます。19世紀におけるこの二つの言葉の使い方を見ますと、*concurrency* の方は相手を蹴落とすという含意で用いられるのにたいして、*émulation* は良い意味での競争、翻訳すれば、切磋琢磨が一番適切な訳語だと考えます。学術における国際協力はこの *émulation* をふくんだ協力、国際的な切磋琢磨と協力ということではなかなければならないでしょう。とりわけ中国研究にかんしては、中国の空間的な広大さ、長い歴史、中国文明が世界に及ぼしてきた影響など、どの点をとってみても、とりわけ国際的な切磋琢磨と協力を必要としております。

私たちは、こうした先輩の事績に学び、またそれにもとづきつつ、学術の国際協力の一層の推進に努力する責務を負っております。今日のシンポジウムが、今日盛んにいわれるグローバル化を、単なるかけ声やある特定の見方や基準の押しつけでなく、真に実りのあるものにする契機となることを願っております。最後になりましたが、ご多忙のなかを講演いただく4人の先生に、心より感謝申し上げます。簡単ではございますが、以上で私のご挨拶といたします。(拍手)

司会 どうもありがとうございました。京都大学のかつての東方学の在り方と申しますか国際的な取り組み、それからわれわれ人文科学研究所のさまざまな面における国際的な取り組みを踏まえて、今後のあるべき姿を、国際協力という形でやっていかねばならないと

いう、きょうのシンポジウムのイントロダクションとして、たいへんふさわしいお話をいただきました。

総 長 挨拶

京都大学総長 長尾 真

司会 先ほどご案内にありましたように、きょうは長尾総長にご臨席いただいておりますので、まず、長尾先生に一言お話をちょうだいして、きょうの討論を始めさせていただきたいと思います。

それでは、長尾先生、よろしく申し上げます。

長尾 皆さん、こんにちは。今回、3回にわたりまして、人文科学研究所がこういう21世紀に向けての東洋学ということについてシンポジウムをするということになりまして、私としましては大変意義のあることだと考えております。本来ならば第1回のときに来ましてごあいさつを申し上げるべきところだったんですけども、第1回目はちょうどハーバード大学の学長の就任式のとくに当たりにまして、招待を受けハーバード大学へ参っております、残念ながらこちらは失礼をさせていただいたわけでございます。



ハーバード大学は、エンチン研究所という東洋学に関する世界有数の研究所があるわけでございます。参りましたら、ライシャワー日本研究所の方々が私の歓迎会をしてくださいます、そこにはエンチン研究所の方々も何人かおいでくださっております、研究所の素晴らしい内容についても少しばかりお聞きしたところでございます。

その研究所と並び称されるといいますか、それ以上に素晴らしいのが私どもの人文科学研究所ではないかと考えておりますが、戦前から始まりまして、戦後、改組され人文科学研究所ということになって50年ばかりの歳月が流れてまいりました。非常にたくさんの研究成果が出てきているわけでございますが、西洋部、東方部、日本部とある中で、東方部のほうは、京都大学はじめ日本全体の東洋学の伝統の中心になって、これまでいろいろ研究をしてこられまして、非常にたくさんの有名な先生方を輩出しているわけでございます。

そこで、この研究所がこれからますます発展していくために、現時点におきまして、これからの東洋学はいかにあるべきかということ再度総合的に検討することが必要ではないかと考えられるわけでございます。人文科学研究所におきましては、中国を中心として古代から始めまして、ずっといろいろな時代に関して研究が進められておりますが、現代中国、あるいは現代のアジアにつきましては、文化大革命前後、あるいは以後については、

まだまだ研究が不十分ではないかと思われま。特に最近の中国の変わりようというのは非常に激しいものがございます、私も何年か前から中国の北京とか上海、あるいは香港に行ったりしてまいりましたけれども、ここ数年の中国の変わりようというのは、私のような素人が見ておりましたも大変なものでございます。特に経済的な面での変わり方というのはすごいものがございます、日本以上に資本主義的なといえますか、そういう面もある変革でございます。

私は大学におりますから、中国の大学を通じてものを見るということになりますけれども、例えば北京大学、清華大学なんかの大学の構造、それから大学でやっていること、それから大学と社会との関係といったようなことは、アメリカの産・学連携といえますか、産・学の関係より以上にすごい変わりようがございます、例えば北京大学、清華大学なんかは100以上の会社を自分で設立して持っているとか、あるいは大学の先生方が会社を設立してベンチャー企業みたいなことをやっているとか、いろんなことがございますし、香港財閥なんかからも寄付をもらって新しい建物をどんどん造るとか、そういったことをやっている。いったい大学というのはどういうものであるか、どうあるべきかということについて、われわれ日本の、特に伝統のある京都大学の学問に対する考え方からしますと、非常に極端な面が多々あるわけがございます、そういう意味でも、中国の変わりようというものを克明に見ないといけないのではないかなと考えるわけでございます。

21世紀にはおそらく中国が、何と言いましても世界の政治、経済、文化の各方面で大きくクローズアップされていくことは間違いないわけがございます、そういった面から見ましても、中国を中心とする東洋というものをいろんな観点から研究するということが大変大切になってくるのではないかと、そういった意味におきましても、京都大学の人文科学研究所の役割というのがますます高まっていくのではないかと考えるのであります。そういったことも含めて、この3回のシリーズのシンポジウムによりまして、21世紀における新しい人文科学研究所、21世紀における新しい東洋学というものをしっかりと見定めていくための、意義の深いシンポジウムになるのではないかと期待しているところでございます。

私はまったくの素人でございますので、勝手なことばかり言いましたけれども、ここにおいでになりますパネリスト、スピーカーの方々、それから聴衆の皆さま方はこういう分野のご専門だろうと思っておりますから、どうぞいろいろな面からご議論いただきまして、有意義なシンポジウムであってほしいと思っております。

どうもきょうはありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございました。どうもこの研究所では現代の中国に対する研究がすこぶる足りないのではないかとこの趣旨のお話を承りましたが、これは同時に、われわれに対する叱咤激励として受け止めております。きょうはそのことにも留意しまして、パネリストの先生方にはその方面の国際協力の在り方を含めてお話いただけるものと思っております。

漢字情報学と国際協力

島根県立大学メディアセンター長 勝村哲也

司会 それでは、早速きょうのシンポジウムの本番をこれから始めさせていただきたいと思います。申し遅れましたけれども、司会を担当させていただきます当研究所の高田でございます。よろしくお願いいたします。

きょうの最初のスピーカーですが、「漢字情報学と国際協力」という課題で、勝村先生にお話をちょうだいいたします。勝村先生は、私ども人文科学研究所のOBでありますので、多くの方はよくご存じだと思います。今は名称が変わってしまいましたが、旧東洋学文献センターで長くお仕事をされて、これもご存じの『東洋学文献類目』というものの編纂に長く従事してこられました。その『文献類目』は、1980年以降、勝村先生の主導でコンピューターによる編集をやってまいりました。おそらくこの分野では世界に先駆けてこういうことをやり始められた斯界の先覚者とでも申しますか、そういう立場におられます。近年は諸外国の漢字処理関係の研究者として緊密な連携のもとに国際的に活動しておられます。また現在は、島根県立大学のメディアセンター長という重責を担っておいでです。きょうはいろいろ面白いお話をしていただけるものと期待しております。

では、よろしくお願いいたします。

勝村 ご紹介いただきました勝村でございます。「21世紀の東方学」という題でございますので、なるだけそういった現代に則したお話をしようと思っています。「漢字情報学と国際協力」という題は高田さんのほうで付けてくださいましたので、それにもできるだけ合わせてお話をしたいと思っています。

一番最初にお話しますのは、最初のページでありますけれども、これはカリフォルニア大学のバークレー校の工学部長をしておりますリチャード・ニュートンさんという方が、今、どんなことをなさっていて、そしてそれについてわれわれがどのような協力をしているかということからお話をしようと思っています。次世代のデジタル革命というようなものの基礎を考えようという趣旨の授業をなさっておりまして、ご多分に漏れず、今様の言葉で申しますと、バークレーの独立法人化問題を考えて、産・学協同の授業、あるいは国際的な授業をやるという提案でもあります。



彼がどんなことをやっているのかということ、最初にごく簡単に申しますと、それはスマートスープ計画というプロジェクトであります。それは大きなプロジェクトの中の一部なんです、当面はスマートスープをやっているということなんです。

どういうことかと言いますと、ここに商品があります。これをスープの缶詰としますと、賞味期限が2002年の11月6日と印刷されていますけれども、これが本当に中身の賞味期限が2年の11月6日なのかどうかということは分からない。それ以前に品質が悪くなってしまうかもしれないし、ひょっとすればそれ以降でも食べられるかもしれない。それを何とか表示しようということで、この中にソルトキューブ・コンピューター、塩粒大のコンピューターを組み込みまして、そこから情報を表に発信させます。そういたしますと、仮に青、黄色、赤と表示されるとすると、日付に関係なく、日付は目安として、青ならば、だれが食べても大丈夫と。黄色ならば、高田さんが食べても大丈夫と。赤なら、私ならもう駄目というように目安が分かるというような計画のようです。

それがさらに進みまして、今、どんなことをやっているかと言うと、お買い物に行きますときに、リストバンドのようなものの中にいろんな情報が入ってきまして、そしてもうクレジットカードもなくなって、それをちょっとかざすだけでコンビニで買い物ができるという世の中になると考えておりまして、そしてそのときにスープの前を歩きますと、「勝村さん、これ、買ってください」とスープが語りかけると。なぜならば、私が1度買ったことがあるから、そのことをスープが記憶している。高田さんがそこを通っても、スープが記憶していなければパスである。京都大学の学生が来ますと、その人は時々赤色のスープも買ってくれるから、安くしとくよと。3つで100円とかいうようなことも語りかけるというような実験でありまして、そこらあたりまではだいたいうまくいって、まだ実験段階。こういう計画になりますと、物1つ1つにコンピューターが組み込まれるようになる。

これをネットで結ぶといたしますと、「IPV8」と書いてありますけれども、コンピューターの番号、住所登録も、今のV4ですと、4億ぐらいのコンピューターに対応できます。計画してありますのが、V6ですとどのぐらいですとか、V8ですと、非常にたくさんというぐらいで、ありとあらゆる、21世紀中は大丈夫かというぐらいの量の、スープまで番号を振ることができるようなことを考えてみよう。それからそれはどんなものを扱うのかと言うと、時間、空間を超えてタイムマップというようなものも想定してみよう。情報の扱う範囲、コンピューターの範囲もそういうものです。

その次の「BC & AD」と書いてあるのは、われわれ情報屋さんといいますか、漢字情報などをやってる者のしゃれでして、BCというのはビフォー・コンピューター、ADというのはアフター・デジタルという意味で使っておりまして、ADとBCは隣合わせにあるのではないんです。コンピューター以前の社会と以後の社会がどのように便利になったのかというのは皆さんのご承知の通りですが、今、まだデジタルの時代が始まったか始まらないかといった微妙なところだという認識で情報屋はおります。というのは、完全

にデジタルなコンピューター，デジタルを軸にしたコンピューターという時代にまだ入っていない。それは機械的な部分が相当影響しています。実際，コンピューターが故障するのは，デジタルな部分で問題が生じるよりは，機械的な部分で問題が生じることのほうが多いわけで，これからのデジタルを中心とした革命を起こしていく。そういうときは次々とデジタルの改良が行われて，これからはいわばデジタル・センチュリーに入って，これはずっと続けていくことであると。次世代のデジタル革命という表現ですが，その次にまた次世代のデジタル革命があるようなものであると。

私たちはITという言葉はあんまり使いません。ITというのは，ずっと昔から，長尾先生がお仕事をなさったころからあった言葉ですけども，それはこういった基準からいきますと小さなことなんです。ついでですが，IT革命という言葉は欧米ではまったく使われておりませんで，ひょっとしたら日本では前の総理が使われたことで異常に広まった言葉なのかとも思いますけれども。

そうやってきますと，1年の取り扱う単位というものも，今のままでいいのかどうかということが問題になってきます。1週間を1日と考えるような，ドッグイヤーという考え方も考えられてきまして，7年を1まとめにして考えていこうかと。あるいはその半分，ここの大型計算機センターでも3年とか4年とかで計算機を替えていきますけれども，そういう半年に1回とかいう単位で物事を整理して，今までもこれからも考えていこうかというようなことも考えています。

そういったときに，意外にも漢字というものは，いろいろな情報を扱うときに1つのコンテンツになるんだと。漢字というものは1つのイメージを持った言葉であります。象形文字でありますので，たった1文字でいろんな情報をそこに封じ込めることができる。属性と申しますけれども，そういうものを持っているので，漢字を扱うということはなかなか面白い実験ができるということで，これからそういう協力をしようかということになっています。

ちなみに申しますと，こちらで提供しておりますデータベースの，先ほどご紹介になったCHINA3と申しております『東洋学文献類目』も，実は大型計算機センターで使われる全部のデータベースの第3位なんですね。1位と2位は物理学。これは飛び抜けておりまして，INSPECというようなデータベースですけども，あるいは医学情報もこれの別枠にございますけれども，非常にたくさん使われますが，離れた第3番目の銅メダルは，実は『東洋学文献類目』なんです。だれがそれを使うかと言うと，ほとんどは工学部の学生とか工学部の人で，人文の人はあんまり使わない。それぐらい工学部の世界で注目されている。そういう点で，工学部の人たちの材料にもなっているということでもあります。

そこばかりしゃべってしまいまして，時間があと5分少々になってしまいました。21世紀にどんなことができるのかということで，昔の『報知新聞』に記事が載っておったのですが，一番下に犬との対話ができるようになるということが書いてあります。このことだけがないわけです。ほかは全部実現しました。

100年で予言もほぼ全部実現したんですが、この犬との対話もニュートンさんのグループで始めまして、そのプロジェクトは僕がやりたいということで、私も関与しております。実際、犬との対話はもうかなり自在にできるようになりました。なぜかと言うと、犬に注射針を入れて、ホルモンのところとか白血球のところとかみんな情報を取って、こちらも入れまして、どういう心情があるかというようなことをあれこれと考えているわけです。

2番目のところは、非常に小さなコンピューターの中に非常に大きな情報を持ちだす。8次元のコンピューターというのは、今は4次元としますと、未来予測ができるような、あるいは過去を振り返るような時代になってきたんだと思います。

ちょうど長尾先生がいらっしゃっているので、長尾先生のお仕事を私流にご紹介しますと、先生は非常に先見的な先生でありまして、計算機センター長のときに、第2期目ですが、83年にネットワーク係というものを新設なさいました。いろんな名称があったようですが、最終的にネットワークと。今はネットワークというのはどこにでもあるんですが、1983年の段階のここから今のすべてスタートしています。

それから長尾先生が図書館長のときは、電子図書館というものをおつくりになりました。これは非常に先進的なもので、日本で初めてのデジタル・ライブラリーです。私は今、島根におりまして、島根大学で何か書けというので書きましたのが「電子の図書館」という題ですが、そこにもちょっと借り物をいたしまして、長尾先生は「いつでもだれでもどこからでも京都大学の英知が見える」という素晴らしいキャッチフレーズを作られんですが、ちょっと「京都」を取りまして、使わせてもらっているわけです。

その後、図書館長が代わりますとすぐ変わっちゃって、「いつでもだれでもどこからでも世界の英知が京都大学で見える」というような、これは私は大反対したんですが、そんなことを言うと、暴露したって、また図書館の人に怒られるかもしれませんが、長尾先生がせっかくデジタル・ライブラリーと言われたのに、デスクトップ・ライブラリーなんて、変な名前を付けているのはけしからんと言っただいぶ文句を言ったんですが、「デスクトップの」というのはもうすぐなくなってしまう。しかし、長尾先生は非常に先見性があったものだと感心いたしまして、私もそれにならいたいと思って、今、メディアセンターをやっています。

それともう1つ素晴らしいのは、21世紀に向けて漢字情報研究センターを当研究所におつくりくださったということで、これはこういう講習会においても、また、これからの京都大学の将来にとっても大変意義のあることであるとともに、世界にいろいろ貢献できる場が保障されたんだと思っています。

最後になりましたけれども、漢字情報学というのは、これからは東洋学と密接に結び付いたものでないと思っています。漢字処理というものの世界、つまり計算機を使って漢字がお手伝いするような時代はもう終わったんだと、あるいは終わらなければならないのだと思っています。

ちなみにここで開発しました。漢字というのは、幸い政府のほうに受け入れられて、総

務省で全面的に採用されて、今、もうわれわれの手をほとんど離れております。つまり実用の段階に入ったら、あとはもうそういう人々に任せて、自由に加工して、自由に使えるようにしてください。あとはその意味付けとか属性とかだけお手伝いするという時代が変わっていく。

やはり研究というものはこれからなされなければならないと思います。研究と結び付いてなされなければならない。具体的にどのようなことがあるのかということについては、ECAI でありますとか、ADC、これはアジア・デジタル・コンソーシアムで、先ほどお話がありましたハーバード大学と京都大学などを中心にこれからつくろうかという組織で、お隣のウイッテルンさんにもご協力をお願いしているところです。すでに既存のECAI、エレクトロニック・カルチャー・アトラス・イニシアチブとか、パシフィック・ネイバーフッド・コンソーシアムとか、あるいはウイッテルンさんがやっておられるエレクトロニック・ブディスト・テキスト・イニシアチブとかというようなものの紹介を少ししております、来年の9月に、私のおります島根県立大学と大阪市立大学のジョイントでこういうことを開催するという宣伝を少しさせていただきます。ちょっと長くなりまして、どうも失礼しました。

コ メ ン ト

人文科学研究所助教授 クリスティアン・ウイッテルン

司会 どうもありがとうございました。国際協力という面のもう少し具体的なお話は、次にコメントしていただくウイッテルン助教授、それから後で会場のほうからもご質問のような形でご意見を頂戴した後で、もう少しお話をお伺いできればと考えております。取りあえずコメントを先にさせていただこうと考えます。

それでは、お願いいたします。

ウイッテルン ただいま紹介のあったウイッテルンと申します。まず、漢字情報学というのはいったい何でしょうか。まだ完全に生まれてないような新しい分野ですけれども、まさに生まれるところなのだと思います。今現在で言うと、おそらく漢字を主に扱ってる東洋学が1つの親になり、もう1つは、おそらく情報学、英語で言うとコンピューター・サイエンスが親になっていると思います。そういう両者を合わせたような新しい分野です。欧米でもちょっと変わった形ですでにでき上がったものがあるって、そこでは Computing in the Humanities、人文科学における情報処理という名前が付けられています。2つの親の間には非常に競争的な在り方もあると思いますけれども、それについて後でもう少し述べることにして、今のところは、その新しい分野はどういうふうに出てくるかということをもう少し考えたいと思います。

つまりこの分野が初めてできる前に、だれかが自分なりの研究課題として扱ってるということがあって、また1人だけじゃなくて、ある程度の人数が集まると、学会でまずパネルからはじめて、次いで自分の学会を持つようになり、自分の学術雑誌を持つようになります。最終的には組織としてもそういうコース、分野、研究科もでき上がるようになるわけです。つまり最初は個人的に優れた学者から始まるんですけども、ある程度発展すると、その組織化が必要だと思います。それが1つ、漢字情報学の新しい分野についてです。

もう1点は、主に情報学から来てるんですけども、コンピューターの中で資料を扱うために、ある程度の基準に従って扱わないといけないことになっています。情報学はそういう研究方法、あるいは方法論に従って進んでいくのですが、人文科学における方法論はちょっと異なってますから、そういうところからも両親ということから見ると非常に面白い働きが見えると思います。つまり情報学は、おそらく自然科学が持っているような方法が、はっきりした情報に従って結論を出せるようになっていますが、それに対して人文科学にはそんなにはっきりした情報がないことが多いんですね。たとえば歴史を考えると、歴史上の人物に関して今残っている資料は、その資料しかないんですから、どの日に生まれたとか、どの日に何をやってるかということにははっきりできないところが多いわけです。ほかに、例えば言語の発展とかいろんなことで、いわゆるファジーな情報が多いので、そういうものを情報学的な、つまり自然科学的な扱いをしようとする、やっぱり矛盾がありますから、漢字情報学という新しい分野では、新しい方法を生み出すことが必要だと思っています。

もう1つ、人文科学から情報学に対しての責任であると言えるかもしれないんですが、もちろん技術的に可能かどうかということはさまざまですけども、それを本当にすべきかという問題意識を持たないといけない。つまり生物科学ですでに問題になっている感じだと思いますけれども、例えばクローンは動物でできるのですから、人でもできるわけですが、こういった問題はエシクな面からも考えないといけない。つまり本当にやるべきかという問題、そういう課題があります。もちろん情報学とか、われわれの分野にもすでにありますけれども、例えばネットワーク情報がだんだん進んでいくと、今度はプライバシーが非常に問題になってきます。私がどういうスープが好きかということは、だれに分かってほしいのか、ほしくないのか、という問題は非常に大きいと思います。もちろん私のためにその情報を使ってもらえばいいと思いますけれども。例えばスーパーマーケットのスープを売っているところは、私のためじゃなくてそれ自身のために働いているわけですから、そこには大きな矛盾があります。そういうものを無視して研究だけ進むことはできないと思います。これは漢字情報学の新しい分野についての別の1つの問題です。

もう1つは、国際協力についてです。ある面では言うまでもない問題だと思いますけれども、学問には国籍がないということです。つまり学問的に研究を進めたいことであれば、同じ研究をされる方の国籍とはまったく無関係に協力してもらいたいと思うわけです。隣の部屋にいても、まったく世界の裏側にいても、今の情報学、情報通信のおかげで、それ

はもうあまり重要ではなくなりました。そういう意味で情報学と国際協力を1つにまとめて考えてもいいと思います。

もちろんそういうことが言えるんですが、反面このような理想的な国際協力にとって妨げになっている壁もまだ幾つかあります。1つは、お互いに違う文化で生まれて、違う言語を持つところであれば、コミュニケーションが取れない場合が多いんです。つまりお互いに違う立場から同じものを見るか、あるいは違う立場から違うものを見るかによって、非常に微妙な違いのあることもありますから。自分の文化でも違う面から、つまり外から見ると、自分の文化の基になる古典文学、遺産のようなものでも、時代や地域的な距離の両方があると、やはり少し違ってきます。そういうところで国際協力はもう1つの意味があると思います。

もちろん国際協力は個人的なやりとりだけじゃなくて、ある程度組織からも支援を受けないと実質的な協力ができません。そのために勝村先生の話にも出てきましたけれども、幾つかの国際的な協会や組織ができ上がっています。例えばECAI、エレクトロニック・カルチャー・アトラス・イニシアチブというのは、1つの方法論に従って、つまり地図の概念をもっているような学問的な成果を整理する方法ですけども、それは国際協力の1つのパターンであると思います。

もう1つの例を挙げると、EBTI、エレクトロニック・ブディスト・テキスト・イニシアチブは、1つのテーマを中心に国際協力が進んでいるような組織ですけども、両方とも漢字情報学にとっても非常に役に立つと思います。それだけじゃなくて広い意味の学術組織でもありますし、漢字情報学という新しい分野が、議論しながら成立してるところだと思います。

司会 ありがとうございます。「漢字情報学と国際協力」という課題について、それぞれの概略をうまくまとめていただきました。ただ漢字情報学というまだ必ずしもかたちの定まらない分野については色々な課題があると思いますので、議論していただければいいのではないかと思います。

1つは、漢字情報学について、こういった学問があり得るのか、あるいはあり得るとして、将来、どのような形を取るべきなのかという問題があります。パネリストの勝村先生、それからコメントをされたウイッテルン先生、お二人とももともとは人文科学のご出身ですから、そういう意味では必ずしも漢字情報学の実体について、全面的な把握になっているのかどうかということも多少気にかかる部分かと思います。

なかなか短い時間では難しいんですけども、それを補完するようなご意見、あるいは質問等ございましたら、お一人、お二人、時間は大変限られてますけれども、お願いしたいと思います。では、安岡先生、お願いします。

安岡孝一 ちょっと分からなかったところが幾つかあります。情報学の世界では国際協力

というのはごく普通になされているというか、もともと外から入ってきたものだから当たり前だというのは分かります。漢字学というのも、実は一応外から入ったものですから、もともととして国際協力されているのは当たり前と。全然別の意味でされてるのは当たり前だというのも分かるんですが、この2つを漢字情報学として融合させたときに、どう国際協力すべきなんだろうかというのが、非常に私も疑問として思っているんですが、その辺について、勝村さんとウイッテルンさんにご意見があったらお願いしたいんですが。

司会 ありがとうございます。簡単をお願いします。

勝村 やはり漢字を用いている東洋学の側から問題をぶつけていくのが本筋で、これからはそうなっていくだろうと思っています。

司会 よろしいでしょうか。なかなか議論が発展しにくいといいますか、反対から言いますと、この課題は、パネルディスカッションの4つある題目の1つということになしに、全日これに当てないと、ある程度の共通の理解というところまでいかないような気もいたします。実際に漢字にかかわる情報学的研究がさまざまなされているにもかかわらず、漢字情報学という学問が、必ずしもまだはっきりした形を取っていないわけですから、今後はいろいろな機会を見つけながら、この方面の研究の実体に対して、もう少し枠組みを考えていくといいますか、定義してかかる必要があると思います。そういうふうにしてこそ初めて漢字情報学の正しい発展が可能になるということかと思えます。また、最後に討論の時間がございますので、そのときにでもお話いただければと思います。

愛知大学現代中国学部の海外拠点

愛知大学教授 緒形 康

司会 時間の関係で先に進ませていただきます。お二人目は、愛知大学の緒形先生に、「愛知大学現代中国学部の海外拠点」という課題でお話をさせていただきます。緒形先生はまさに今、愛知大学の現代中国学部というところで、実際に中国と共同の作業をいろいろなさっておいでで、その経験を踏まえたお話をしていただけると考えております。

緒形先生は現代中国学部の教授をしておいでですけども、もともと東京大学で学位を取られたわけですが、そのときのテーマは、進化論を中国に紹介したことで有名な嚴復の研究でありまして、その後、専ら中国共産党史をはじめとする現代中国の研究に従事してこられました。愛知大学の現代中国学部で出しておられる学術雑誌『中国21』の編集も担当しておられるということで、この方面では一番造詣の深い方だと伺っております。

それでは、よろしく願いいたします。

緒形 ご紹介いただきました緒形です。私が現在勤務する愛知大学現代中国学部は、ちょうど今から5年前の1997年4月に創設したばかりの大変若い学部です。東海地域の1私立大学がこういう大きなプロジェクトを始めたことについては歴史的な理由がございます。私たちの大学の前身が東亜同文書院という、1901年から45年まで上海にキャンパスを構えた戦前の高等教育機関であったことがそれです。1945年の敗戦によって同文書院は廃校になり、44年の歴史を終えました。日本に引き揚げてきた同文書院の教員が、やはり廃校に追いこまれた他の植民地大学である京城帝大と台北帝大、それからごく少数ですけども満州建国大学の元教員と共に、愛知県豊橋市に1946年に設立したのが現在の愛知大学です。



1996年、新しい大学になって50年を迎えた節目の年に、東亜同文書院の伝統をもう1度部分的に復活させようという意見が出てまいりました。同文書院はスパイ大学という汚名もあり、敗戦後の長い間、私たちはむしろそうした過去を切り捨てる方向で動いてきた。しかし、果たして負の遺産ばかりだったのだろうか。中国をその現場から理解しようという教学プログラムには、現代中国の真の理解がますます求められる現在から評価すべきものが含まれていないか、その良いものを継承することはできないかということで作られた

のが私たちの学部です。

こうして、まさに名称通り、現代中国を全面的に教学の対象にし、現代中国の政治・経済・文化に対する広い理解、これは語学力が中心になるのはもちろんですが、単に語学力ということだけではなくて、全人格をあげて中国と接していけるような若い人材を育てることを目標にした学部が生まれました。高く掲げたキャッチフレーズは、中国との「直接対話」に他なりません。そしてこの「直接対話」を実現するために、カリキュラムの上で、これからお話いたしますような3つの柱を設けるにいたりしました。

まず、同文書院の時代は4年間上海にいて中国語漬けでした。その環境を再現することは無理だとしても、できるだけそれに近づきたい、できるだけ長い期間、中国で集中的に語学教育を行う環境を作りたいということで、現在は1年生の後半、第2セメスター4カ月を用いて、天津の南開大学で約200名の、日本人と中国語を母国語としない留学生（大部分は韓国留学生）の中国語集中教育を実施しています。「現地プログラム」と名付けておりますけれども、これが第1の柱です。

第2の柱は、これも同文書院時代にヒントを得た現地社会調査のカリキュラムです。同文書院時代は、全学生がそれぞれ数名のグループを組みまして、中国に自由に出向いて現地社会の調査を行いました。期間はまちまちです。1カ月という短期のものもありましたし、1年近く調査した人もいますけれども、その調査記録を卒業論文にまとめて、しかも、それをきちんと保管するというのがなされていた。この「調査旅行」の伝統を見直そうということで、私たちは3年生、第5セメスターの夏休み3週間を使って実施する「中国現地研究調査」カリキュラムを設けました。「現地プログラム」のように学生200名全員を調査に派遣することは財政的にとても無理ですから、40名を選抜して教員と共に現地での聞き取り調査をやることにした、これが第2の柱です。

第3の柱は、同文書院では中国語による講義、あるいは中国語による討論というものが日常茶飯に行われていたわけですが、これを現代に生かしたいと考え、中国大陸の現職の先生、しかも、日本語がまったくおできにならない方を専任教員としてお招きしました。最初は3名お願いしましたがけれども、その先生方に中国語による講義、語学ではない専門の講義を受け持ってもらう。まず立ち上げた科目は、中国法、中国文化史、中国社会学、中国史概論でした。「現地プログラム」から帰った学生にそれらを聴講させ、試験レポート等も全部中国語で提出するというカリキュラムを作った、これが第3の柱です。

この3つの柱を実現するためには、当然中国の大学との緊密な学术交流と提携が必要です。私たちの大学は、中国大陸・台湾地域に合計8つの拠点（南開大学、復旦大学、北京語言文化大学、北京第2外国語学院、上海外国語大学、中国社会科学院研究生院、中国工運学院、台湾師範大学）を持っておりますけれども、その中で特に2つの拠点を選んで、現代中国学部の新しい教学プログラムの実践の場としました。すなわち、南開大学、中国工運学院がそれです。

まず、南開大学という海外拠点についてお話いたします。愛知大学にとって、南開大学

との学術協定は1981年以来と最も古い。付言しますと、この協定は日中の大学が始めて結んだ学術協定でもあります。南開大学はそうした前史もあって、現代中国学部の新しい試みに多くの理解と援助を惜しまれませんでした。私たちは、この南開大学のご理解を得て、そのキャンパス内に南開愛大会館という6階建ての教学楼を建設することを許されました。「現地プログラム」という中国語集中教育はここを拠点としています。もっとも、私たちは学部を立ち上げる際、ホームステイという形態を強く希望しました。語学教育の効率を上げるためには日本語の環境からできるだけ離れることが必要ですから。しかし、現代の中国大陸の事情ではそういうことはできにくいということで、次善の策として愛大会館建設に踏み切った次第でございます。

愛大会館は200名の学生を全員収容できる部屋以外に、講義室、事務室、食堂を完備しておりますので、「現地プログラム」以外にもさまざまな有効利用が可能です。先ほど高田先生が少し触れられました、現代中国学部が編集する『中国21』という学術機関誌との関わりで申しますと、『中国21』は「直接対話」という学部の理念を実現するために、中国の専門家の方々と中国語で行った対談記録を毎号掲載するという企画を雑誌の大きな目玉としているのですが、この『中国21』の中国語版を出版するための拠点（日本語原稿の翻訳、編集）は、南開愛大会館に置かれるのが望ましいことだと考えております。

これ以外にも、次のような新企画を南開愛大会館でやれないかと、目下構想中です。まず、南開大学付属高校から直接に留学生を募集する試みです。短期留学生の募集はすでに始めているのですが、長期留学生の募集は「直接対話」を教学目標とする現代中国学部には不可欠です。その際、面接試験を実施しなければなりません。南開愛大会館であれば、日本ではなく現地での面接が可能となります。

先ほど中国語による講義を3名の先生をお招きして行っているという話をしましたけれども、私は個人的には3名ではまだ少なすぎる、もっとこの枠を増やしていきたいと考えております。しかし、財政的な問題もあって直接招聘には限界があります。唯一考えられるのは、衛星テレビを使った遠隔授業プログラムです。最近は大学に関する規制緩和も進んでおりますから、南開愛大会館を有効に使えばこれが可能になるのです。南開愛大会館と愛知大学にそれぞれ衛星テレビ装置を設営して、愛大会館に中国各地から大学の先生をお招きして、そこで連続講義をやっていただく。その記録をビデオに撮るなり、あるいは同時放映して、日本で学生にその講義を聴講させる。成績評価については、試験答案を講義終了後、中国大陸に送って先生方に採点していただき、単位化するということが考えられないか。この衛星テレビを使った講義ビデオは、日本人の学生にとって意味があるだけではないでしょう。中国のさまざまな地域の先生方による講義は、中国大陸の学生諸君にとってもそう容易く聴講できるものではありません。教材販売という商業ルートに乗せても十分に採算の合うプロジェクトであると思われます。南開愛大会館は、こうした国境を越えた授業形態の可能性を追求してゆく上でも、可能性に満ちた「拠点」なのです。

南開大学と並んで、中国工運学院という「拠点」にも、私たちは大きな期待をかけてお

ります。ここは現代中国学部のカリキュラムの第2の柱である「中国現地研究調査」の舞台であります。中国工運学院という学校は、中華全国総工会 中国共産党が指導する、労働組合のいわゆる総元締め が経営する幹部養成学校です。私たちが中国での社会調査を行うに際してこの学校を選んだのは、次の点に考慮したからです。現在の中国大陸で外国人が社会調査を行うにあたっては体制の違いということもあり、さまざまな制約がございます。しかし、工運学院は労働組合関係の学校ですから、全国各地に組合支部を持っておりまして、特に工場労働者との関係が深いために、国有企業などの調査にあたっては多くの便宜を提供して頂けるからでした。「中国現地研究調査」は北京、上海、大連と3回実施したところで、2002年は昆明を考えております。

この「中国現地研究調査」が、同文書院時代の「調査旅行」とその「報告書」を意識して立ち上げたプログラムであることは先ほど申し上げました。中国の近現代史をやっておられる方はご承知だと思いますけれども、戦前の日本が行った中国現地調査にはかなり精度の高いものがあります。満鉄調査部が東北・内蒙古・華北・華東で行った「慣行調査」は最も有名です。フィリップ・ホアンやデュアラなどの歴史家がこの「慣行調査」を使って挙げた中国社会研究の成果についても周知のことでしょう。同文書院の「調査旅行報告書」もそうした戦前の成果の1つとして、今後、歴史学や社会学の分野の専門家が一定の評価を加えるべきものと思われま（愛知大学に保存されているこの「調査旅行報告書」は、雄松堂の協力を得て全篇マイクロフィルム化されました）。

同文書院の調査旅行は1901年から44年間続きました。日中戦争で調査が実施できなかった数期を除き、ほぼ40年以上にわたって継続したこのプロジェクトの調査範囲は、中国のほぼ全域にわたっています。しかも、この調査旅行は外務省の強力なバックアップのもとに通行証が発行され、学生はかなり自由にいろいろなところに入りました。日中戦争中も汪精衛の上海偽政府がパスポートを発行している。さらに、これらの調査記録を東亜同文会、あるいは外務省が中国専門家を使って整理し直す。整理し直して出来あがった最も優れた成果の1つが、『支那省別全誌』です。

私たち現代中国学部が、この「調査旅行」のレベルを越えることは、はなから不可能です。それは、半植民地に苦しむ中国を横目に帝国行政の強力なお墨付きで推進した「自由」調査ができないという意味からだけではありません。4年間上海で教育を受けた同文書院学生の中国語力と、現代中国学部学生の「現地プログラム」4カ月の中国語力には雲泥の差がありますし、全員参加がとても無理だということもある。また、学生の調査記録を後で専門的に整理し直すという余力が、残念ながら私たち教員の側にはない。50年前の先人たちの試みと比較して、非常に見劣りがするのは如何ともしがたいのです。

ただ、私たちが同文書院の「調査旅行」と比較して1歩を進めたと言って良いものがあります。それは何かと言いますと、戦前の満鉄や東亜同文書院の記録はいずれも帝国日本の植民地経営の利用に供されましたが、そうした政治的目的に自分たちの調査記録が転用されることの是非を問う姿勢が、少なくとも同文書院側にはかなり稀薄でした。もしあれ

ば、汪精衛の上海偽政府が発行するパスポートをあれほど無造作に使用できたはずがありません。社会科学に関するデータは客観的な精度が高ければそれでいいのかという問題を、戦前の社会調査は完全に見落とししていたと思います。

スパイ学校という汚名を私たちの先人がこうむることになったのも、そのことと関係があります。私たちがそういった過去の愚行を繰り返さないためにはどうすればいいのか。現代中国学部が達した結論は、調査した内容を中国の人々に公開してゆくということでした。自分たちが何を調査したかということを知りたいという中国の人々の前で発表し、自分たちのやったことが文化の独善性というかエスノセントリズムに陥っていないかを、中国の人々と共に確認するということです。

それで21日の調査の中、最後の5日間を、学生が中国語で調査記録をまとめ、中国人学生の前で中国語で発表して、中国の学生からコメントを得る活動、いわゆる「国際シンポジウム」に当てようということになった。そんなことができるわけがない、時間的にも能力的にもどだい無理だという強硬な反対意見もありましたが、とにかく1年だけでもやってみようということに落ち付きました。確かに、この企画は大変きつい。最後の5日間は、学生も、ついて行った教師も文字通り不眠不休です。調査記録の中国語作成、公表に適切な内容かの工運学院側のチェック、そのチェックに基づいた原稿修正、原稿の内容を正確に伝えるための発音練習などなど。しかし、悪戦苦闘の末、国際シンポジウムが終わったときは、学生も教員も一種名状し難い感動に襲われました。やはり、やって良かった、この企画は「中国現地研究調査」の不可欠の一環なのだという確信に似たものを参加者全員が得ました。これによって、私たちは自分たちの調査の内容を、調査した対象へと還元し、その調査の意味を検証するという、調査における最も重要な方法論を得たこととなります。

この試みには実はまだ後日談があります。日本側が中国に調査に出向き、その成果を国際シンポジウムで発表した以上、シンポジウムに出席し、貴重な意見を寄せてくれた中国の大学生も日本に招こうじゃないかという気運が学生たちから起こってきたのです。もちろんシンポ参加者全員を招くことはできませんが、10名ばかりですけれども、愛知大学にお招きして、1週間ほど、ちょうど私たちの地域のすぐそばにトヨタ自動車がございますので、トヨタの工場見学を中心に社会調査をやっていただいて、中国の学生諸君には、今度は日本語で調査結果を発表してもらい、われわれが意見を出すというものです。2001年5月に実施したばかりではございますが、「中国現地研究調査」は少しずつ、文字通りの日中の対等な相互学術交流という段階に進んでいます。私たちは、さらに対等な相互交流の実現に向けた努力を今後とも続けていきたい所存です。

現代中国学部が海外拠点において模索中の以上の試みにつきましては、地方の私立大学としての財政的な限界の他に、それを推進する私たちの側の人材や能力の面での限界がございます。その意味でも、私たちの経験を、ここに集まられた皆さんのもとでやって頂ければ、もっと大きな可能性が開くのではないかと感じておりますし、逆に皆さんがさまざまな場所で進めておられる現代中国との国際協力に関する経験を、私たちにご教示し

て頂ければとも思います。こうした報告の機会を与えていただきました主催者の皆様のご配慮には、改めて深甚の謝意を表したく思います。

以上で報告を終わります。ご清聴有難うございました。

コ メ ン ト

人文科学研究所教授 森 時彦

司会 ありがとうございます。すぐコメントをしていただきまして、その後でまた御意見をちょうだいいたします。コメントーターは本研究所の森時彦教授でございます。よろしくをお願いいたします。

森 非常に中身の濃いお話をお聞かせいただきまして、ありがとうございました。実は私も1988年まで愛知大学に奉職しておりました。もし人文研に換わっていなければ、緒形さんの大変なお仕事を自分が引き受けることになっていたかと思いと、やれやれと安堵いたしますとともに、緒形さんの献身的なご努力に敬服するばかりです。

私がおりました頃は、法学部、経済学部そして経営学部と、そのころは法経学部という一つの学部を構成する三つの学科だったんですけれども、そこにそれぞれ中国コースというのが設けられまして、20名ずつぐらいの学生が属しておりました。この現代中国学部というのは、そういった三つの学部に分かれていた中国コースを一つにまとめたものだと伺っております。私学の場合には、そういうふうに資源を有効活用して一点集中ということが可能で、そのことによって得意分野を発展させていくケースが見受けられます。

とりわけ愛知大学の場合は、そういう資源の集中といった意味だけではなく、前身の一つである東亜同文書院以来の伝統をいまに生かすという面でも、この現代中国学部というものが非常に大きな意味を持っているということ、きょうのお話を伺って再確認いたしました。

実は前回のシンポジウムの際に、イタリア・ナポリ東洋大学のシルヴィオ・ヴィータ先生がこういうことをおっしゃっています。皆さまのお手元にありますパンフレットの14ページをご覧くださいたいんですが、その一番下の段のところで次のように言っておられます。「フランス、イタリア、ドイツが海外の施設を持つことは、これもある意味では古典学の伝統が関係しないことはないのですが、特に考古学の分野では、古代オリエント、古代ギリシャ・ローマの研究所が昔からありました。そこに交代で研究者が滞在し、若い人々が長い間現地に住んでいる人の指導を受けて研究するスタイルになっているわけです。そこには植民地時代の影響もないではありませんが、昔からあるものの重要性が現代的な意味で問い直されているのは明らかです」と。もちろん若干対象は異なるわけですが、愛知大学の試みというのは、まさに東亜同文書院の伝統を現代に生かすという試みで

あるように思います。

ただ、先ほど緒形さんは「スパイ大学といわれていた」とおっしゃいましたけれども、ヨーロッパの植民地時代の影響よりもより強い形で、日本軍が中国を侵略したという歴史が重くのしかかっていることも、また事実であります。

東亜同文書院については、これの創設者であります根津一の思想を含めまして、もう一度戦前の日本の対中国政策においてどういう意味を持っていたのかということ、より広く考えてみる必要はあるとは思いますが、ただ、緒形さんが繰り返し指摘されましたように、そういった戦前の東亜同文書院のいいところを現代に受け継いで、そして戦前において問題を孕んでいたような面については、それを克服する努力をする。その手段として、緒形さんは直接対話、とりわけ自分たちが調査したものを中国語で発表し、中国の人たちに聞いていただき、またその反応を直接伺う、という新しい方法によって、伝統をある意味で正しい形で現代に受け継ごうとしておられるということで、われわれ中国学に携わる者、とりわけ現代中国を理解しようとする者にとっては、非常に興味深い、また、意義のある試みであると思います。

私もこの東亜同文書院の卒業旅行の資料を自分の研究にたびたび使わせていただいております。ただ、これは何と言いましても、学部学生の卒業論文程度のもと考えていただいたらよろしいかと思います。ですから、中にはほかの本からの孫引きだけで責をふさいでるような、かなりレベルの低いものもありますけれども、逆にやはり実際に現地に行きまして入手したような得がたい記録も多数あります。例えば私が利用しましたものと、京漢線と隴海線が交差しますところに鄭州という町がありますが、そこに調査に出かけました学生がのこした記録があります。鄭州は河南省とか山西省の綿花を一手に集散する基地で、ここに日本の商社が幾つか進出しておりました。その学生はそれらの商社から綿花取引関係の資料を大量に貰い受けてきまして、そしてどこの産地の綿花がどれだけ鄭州に入ってきて、そしてそれが今度はどれだけ、例えば上海に行ったとか天津に行ったとか、という詳細なデータを卒業旅行報告書にのこしています。これなんかですと、ほかの資料ではとうてい得られないような貴重なデータで、現在の中国学にとってもトップレベルの資料を残してくれていることになります。

もちろん繰り返し申しますように、学部学生の卒論程度のものでありますから、当然の限界がある一方で、やはり現地で実際に調査してきたことの重みというのは、歴史を超えて今に伝わっていると言えます。愛知大学の今の試みが、そういう形でまた今後の日本の中国研究のために大きな礎石を残していってくれるということも、確信をもって期待できるように思います。以上です。

司会 ありがとうございます。先ほどの緒形先生のお話、それから森先生のコメントをお聞きしまして、愛知大学の現代中国学部でやっておられるさまざまな試みについては、私は今まであまりよく知りませんでしたけれども、なるほどいろんなことをやっておられ

るなど大変感心いたしました。われわれ、例えば京都大学のような国立大学でこれをやるうとしますと、なかなか実際には難しい問題が多々あると思うんですね。そういう意味では、1つの試行的なやり方として、愛知大学の試みが将来どういうふうになっていくのかを、注意深く見守っていきたいと思います。

ただ、今し方ご指摘もありましたように、いろんな問題点もやはりこの中には含まれてるわけで、そういった具体的な点について、私自身も質問したいような気もするんですが、何かフロアのほうでご意見ないしご質問等ありましたら、一、二受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。

長尾真 どなたもご質問がありませんので、1つお話をさせていただきたいと思います。私は、京都大学の学生諸君がこれから国際的な視野で物事を考えるためには、ぜひとも外国に行っているような経験をしてもらわなければいけないと思っております、何とかしたいと常々思っております。ただ、国立大学でありますところから、なかなかそれができませんのですけれども、現在、カリフォルニア大学のUCLAと実時間で講義交換をしております、その講義を聴いておりました学生を1週間UCLAに去年の3月に行かせまして、同じ講義を聴いていた向こうの学生諸君と交流をさせました。向こうのUCLAの学生も京都大学に1週間やって来ました。この遠隔講義はオンライン、実時間で、朝の9時から京都大学で講義がありますと、向こうは夕方4時の講義になりまして、一緒に講義を聴いて、質問をお互いにやるとか、お互いにディスカッションするということ、遠隔講義システムでできるようになっているのですけれども、そういうので交流をしてもらいましたら、大変学生諸君には刺激になったということがございます。

それから京都大学の海外フォーラムというのを、今日のこういう形の発表会とかパネルディスカッションをカリフォルニアのサンタクララで今年の1月にやりましたし、つい最近、11月の末にロンドンとエジンバラでも違うテーマでやりまして、大学院の学生をできるだけ多く連れて行きまして、いろんな経験をさせました。

そういう意味で少しずつやっているのですけれども、例えば立命館大学はカナダ・バンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学に宿舎を持っておりまして、毎年たくさんの学生を行かせている。それからスタンフォード大学は、スタンフォード京都センターというところで数カ月ずつ学生を入れ代わり立ち代わり滞在させて、いろんなことをやっている。それから甲南女子大学でしたかどこかはフランスに持っている、あるいはもう1つどこかの大学はストラスブルク近郊に宿舎を持ってやっております。そういうことがありまして、これから京都大学もできればいろんなことをやりたい。

そういったことの1つのやり初めとしまして、経済学研究科が復旦大学に上海拠点というのをつくりました。これから上海地区の学生諸君を京都大学に呼び寄せるためにいろんな活動をしたい。それからできれば復旦大学と京都大学との間でいろんな学術研究交流および学生交流をやりたいと、経済学研究科は考えておられます。そういったことで少しず

つはやってゆきたいということです。

司会 どうもありがとうございました。京都大学においても、これから一層国際協力を進めていかなければならないということだと思いますが、こと中国との関係について申しますと、そう遠いところではありませんし、技術的にも問題はないと思うんですが、先ほど緒形先生のお話にもありましたように、やはり言葉の問題というのが最も大きな課題になるかと思います。

実は、私自身もかつて京大の教養部で7年間中国語教師をした経験がございますけれども、もしこれを京都大学でも本気でやろうとしますと、京都大学における中国語教育の抜本的改革が必要だと思います。もしそういうことを長尾先生が総長としてご支援いただけるのであれば、人文科学研究所としても全面的にそういった中国語教育の改革も含めて取り組みたいと、実は思っております。そういう体制になれば、そういうことも不可能ではないし、ぜひともそういうことをやってみたいと考えております。この問題について、フロアの皆さま方もご意見があれば、後でどうぞ出させていただきたいと思います。ではしばらくお休みをちょうだいいたしまして、大変慌ただしいことで恐縮ですが、45分に再開ということでお願いいたします。

(休憩)

中国文化遺跡の修復事業と発掘

駒澤大学教授 飯島武次

司会 それでは後半部分に入りたいと思います。後半の最初のパネリストは、駒沢大学の飯島武次先生です。お話しいただきますテーマは「中国文化遺跡の修復事業と発掘」ということですが、飯島先生は考古学のご専門で、中国とさまざまな提携のもとに仕事を進めておられます。とりわけ、ユネスコの文化遺産保存の関係で何度も中国に行かれて、中国と共同で仕事をしておられます。ご専門は中国の考古学の中でも古い時代で、新石器時代、及び殷周時代がご専門ですが、「夏殷文化の考古学研究」「中国新石器文化の研究」「中国周文化考古学研究」といった、たくさんの著書を発表しておられます。86年には在外研究員として北京大学の考古系にも滞在されましたし、91年から、北京大学の考古系及び中国社会科学院の考古研究所から教官や学生を受け入れておられますし、かつ、先ほど申しましたように、93年からユネスコの遺跡保護に取り組み、日中間の学術交流を大変積極的に進めておいでです。

今日は、そのご経験からお話しいただきますとともに、スライドでいろいろな写真を拝見できると伺っております。よろしく願いいたします。

飯島 ご紹介いただきました飯島です。短い時間ですが、中国における遺跡の保存修復事業の話と、それからもう1つ、今年、中国陝西省咸陽市で私どもの駒澤大学の考古学専攻が、授業として行った発掘実習の一部を紹介させていただきたいと思っております。

ユネスコは、国際連合の教育科学文化機関です。世界のいろいろな地域に対して、教育・科学方面での援助を行っていく機関です。パリのユネスコ本部の方か

らお聞きした話として、教育関係では国家間、民族間の問題があって最近はあるような仕事ができない。科学関係では近年の世界各研究機関の科学技術進歩はユネスコの仕事をつぶしてしまった。そのような状況の中で、これからのユネスコは文化関係の仕事に力を入れる必要があるということでありました。ユネスコには、文化活動の一環として、文化遺産つまり人類が残した遺跡を守る仕事があります。ユネスコは、遺跡が壊れていくのを止め、保存をし、後世に遺跡を残していくという仕事を近年積極的に行うようになりました。



10年あるいは15年ぐらい前から、日本の国際貢献の必要性が強く言われるようになりました。外務省の文化交流部文化第一課が所管になり、ユネスコの事業に協力していく仕事が進められております。実質的には日本政府がお金を拠出するのですが、直接日本政府が遺跡保護事業を行うのではなく、一度パリのユネスコにお金を入れて、そこに日本の信託基金をつくり、そのお金を使って、ユネスコが遺跡保存事業を行う形をとっています。

このような体制で仕事が始まったのはそう古いことではありません。1990年にタイのバンコクでアンコール遺跡の保存に関する第1回の専門家円卓会議が行われまして、これが初めてです。その後、1992年から交河故城の保存修復事業が始まりました。この遺跡は、新疆ウイグル自治区のトウルファンにあります。最初の保存修復事業の対象として交河故城が選ばれたのは、東京芸術大学の平山郁夫先生あたりがシルクロードをお好きであったことに理由があるような気がいたします。交河故城の風化が著しく、それを保存する事業に日本政府のお金を拠出しました。この交河故城の事業は、おおむね1996年には終わっています。その後、1995年から西安市の唐長安城大明宮含元殿の遺跡保存と修復が行われております。それから2001年の今年からは、クムトゥラの石窟と竜門石窟の保存修復の事業が、ユネスコの基金で行われることになっています。

1993年に外務省の文化交流部から国際貢献の一環として、中国の遺跡の保存事業の援助を計画したところ、中国側が50ヶ所ほどの遺跡を候補にあげてきたので、その中から日本政府が保存事業援助をするのに適した遺跡を選んでほしいとの依頼がありました。どの遺跡の保存の援助をするのがよいか、そういうことを調査し、報告してくれということでありました。外務省は、最初に江上波夫先生や平山郁夫先生にそのような相談をしたようでありましたが、先生方は調査を引き受けたものの、土壇場まで仕事をおやりにならなかったようです。時間が経過し、予算や年度の関係で外務省がしびれを切らしたところ、たぶん「それじゃあ若い研究者の誰かに話してみろ」というようなことを、江上先生あたりが文化交流部のほうにおっしゃったのではないかと思います。そういうことで、たまたま私のところにそういう話が来たということです。

それで若手の研究者5名でミッションを組み、1993年に中国へ遺跡調査旅行に出かけることになりました。中国側が候補にあげた遺跡の数は多く、全部の遺跡を見て歩くわけにもいきません。中国の新石器時代の遺跡は、地中に埋まっていますので遺跡を見た時に迫力がありません。また外務省側としては個人崇拜につながるような王陵の保存はしたくないとの考えを持っていました。さらに日中の歴史に関係のある遺跡の保存修復事業を行いたいという注文が出てきました。そうなるとう都城址が候補に上がってきます。漢魏の洛陽城、隋唐の洛陽城、唐の長安城、渤海の上京竜泉府、それから日中の歴史と直接関係はないですが漢の長安城を調査の対象に選びました。中国を約2週間にわたって歩き、それらの遺跡が、保存する価値のある遺跡であるかどうか、現状はどうなっているか、そのようなことを調査し、その結果を交流部に「中国遺跡保存協力調査報告」として提出いたしました。

それらの遺跡の中で、日本と中国の初期の外交史と関係のある遺跡としては、まず唐長安城が上げられます。遺跡は大変広く、唐の長安城の全域の保存に手をつけるわけにもいかないのです。長安城の北東辺にある大明宮が、保存事業の有力候補になりました。当時、大明宮の含元殿遺跡付近は一部が西安市のごみ捨て場になっていましたし、また蒋介石が掘った塹壕等で一部切断されている場所もありました。このような状態にありましたので、そこを修復して保存することを考えました。西安の市街がしだいに広がって、大明宮を飲み込まんとしておりまして、その保存を考える必要がありました。それからもう1つの有力候補は、倭の奴国王が金印を受け取った場所、これは確かなことはわかりませんが、あるいは卑弥呼の遣いが三角縁神獣鏡を受け取った、これも確かなことはわかりませんが、史書の上で金印や鏡を受け取った場所が漢魏の洛陽城遺跡であります。これら二つの遺跡を、保存修復事業の候補にあげました。

こういうなかで、外務省の考えもありまして、たとえば黒龍江省にある渤海上京竜泉府の保存修復事業を援助することを、当初ユネスコも外務省もそれを考えていたようです。渤海の上京竜泉府つまり東京城遺跡に関しては、ソヴィエトの学者が1932年に調査に入ったことがありますし、1933年に日本の東亜考古学会が発掘調査をし、その後、新中国になると1950年代に中国と北朝鮮の合同調査が行われておりまして、現在は韓国が大変関心を示し、そして現在その遺跡の中には朝鮮族が多数住んでおります。そのような東京城遺跡に関する歴史と現状を報告しましたら、外務省側は複雑な民族問題が起こる可能性を感じたのでしょう、渤海上京竜泉府の保護事業を候補から下ろした方がよいとの意見に傾きました。

1994年3月に細川護熙首相（当時）が、訪中するに際して、日本政府としては大明宮含元殿の修復に関して基金を支出する用意があるということ了中国側に伝えることになりました。この件に関して、中国側と前もって打ち合わせをし同意を得ておいてくれということで、北京の日本大使館員と共に中国側と打ち合わせを行い、細川首相のステートメントの中にその話が盛り込まれることになりました。細川首相の訪中のステートメントの一部として、唐長安城大明宮含元殿の修復協力が先の報告書の内容に沿って中国側に伝えられました。

そして、1995年から含元殿遺跡の基礎的な発掘調査を行い、97年から発掘の結果に基づいて基本計画、設計図をつくり、修復の事業にかかることになりました。唐の大明宮の含元殿は、3つ大きな建物があって、測り方にもよりますが、東西210m、南北80m、残存する高さ15mという大変大きな建物の基壇です。『続日本紀』によれば、天平勝宝5年（753年）の正月に含元殿において、玄宗皇帝の前で、遣唐使の藤原清河、大伴古麻呂が新羅と席次を争っています。これは有名な出来事です。新羅の席次が第一位、第二位に大食国、第三位に吐蕃、その後の第四位が日本でありました。これを知って大伴古麻呂が大変怒りまして、日本は古来新羅より上位の国であるということ唐の將軍呉懐に強く申し入れて、席次を変えさせたと記載されています。そういうこともあって、日本の遣唐使の歴

史とも関係がある大明宮含元殿の修復にかかることになりました。

先ほど申し上げたように、含元殿遺跡付近の一部は西安市のゴミ捨て場、それから蒋介石の塹壕がある荒れた状態でしたが、とりあえず百万ドルの予算で修復することになりました。百万ドルというと1億数千万円ですが、95年当時は、日本円と人民元の外貨比率の関係から、日本国内で行う6億円から7億円の事業ができると考えました。しかしその後、中国の経済発展に伴って、その比率がだんだん下がりがちで、金額にして倍ぐらいにしか使えませんでした。その後、さらに百万ドルの追加があって、現在に至っていますが、現在もなお修復の工事が続いております。

そういうことで、日本政府は、重要な遺跡の保存に、ユネスコを通じてお基金を拠出しそれらの事業に協力をしているのであります。援助・協力をしていくなかで、保存事業そのものに関する日本と中国側の考え方の違いもかなり出てきました。たとえば修復するにあたり、現状をそのまま残すのか、想定される唐代の含元殿に復原して修復するのかという、基本的な問題が度々議論になりました。私は考古学が専門で、つまり地面を掘ることを専門とし、上に修復していくことは素人なのです。建物や基壇を復原するにあたっては、度々難しい議論となりました。唐代の建物がどのような形をしていたのか見た人はいないわけで、建築史の上で最も合理的な設計図を引く必要がありました。京都大学人文科学研究所の田中淡先生とも一緒に仕事をさせていただいたのですが、田中先生は建築史がご専門で、竜尾道の位置と方向、欄干の形などに関して、中国側と多くの議論をされました。それから陝西省政府や西安市の思惑と国家文物局の思惑がかなり違って、向こうの意思決定に時間がかかりました。こういうことも難しい問題だと思いました。

しかし、保存修復事業の間に中国側から技術者が日本に来て、奈良国立文化財研究所や東京国立文化財研究所で、日本の保存技術の研修をして帰るということも行われましたし、私が非常に印象深く思ったのは、中国の遺跡保存の技術も相当高く、また経験も豊かで、風土に適した保存をしていることを知り、私はこの点を非常に印象深く思いました。中国の遺跡・遺構は、土でできていますが、中国の彼らが土の遺跡で経験してきた知識に学ぶべきものが多いという印象を持ちました。保存修復事業の援助に関しては以上であります。

次に中国における考古発掘実習に関して紹介いたします。駒澤大学では、考古学専攻の学生に対して、3年生の必修科目として、「考古発掘実習」の4単位を課しておりまして、12年ほど前に香港に一部の学生を連れて行って実習を行ったこともありますが、基本的には日本国内で1ヶ月から2ヶ月ぐらいの発掘を3年生に義務づけています。私立大学ですので、履修する学生が大変多く、毎年50名ぐらいの学生の面倒をみなければなりません。そういうなかで、日本の遺跡を探すのもなかなか難しいのですが、去年は秋田で合宿をしましたし、その前年は世田谷区内で発掘を行いました。年度によっては、都道府県、市町村で行っている発掘に一部参加させていただくこともあります。

たまたま、陝西省のほうから、昨年、発掘実習を咸陽市の陽陵、漢景帝の陵墓で行わな

お名前を焦南峰さんとおっしゃいます。焦南峰さんが日本に留学していた時に駒澤大学の発掘実習に参加したこともありましたが、陝西歴史博物館のなかに陝西省中国歴史博物館旅行社という組織があります。そこを通じての打診でした。焦南峰さんから電話等で話を聞いたところ悪い話ではないので、それではとりあえずやってみようということになりました。しかし学生の経済的負担も大きくなりますので、従来どおり日本国内のメニュー



陽陵邑における発掘実習

は用意いたしまして、それ以外に、短期間、わずか1週間ですが、中国における考古発掘実習を計画しました。参加する学生がいるか不安でしたが、参加者を募ったところ3年生だけでなく、大学院生の参加希望者もあり、33名の学生が参加することになりました。

内々の話ですが申し上げてしまうと、陝西省考古研究所は、学生1名につき5千円の実習費を求めて来ました。この5千円というのは、博物館学芸員になるための博物館実習費とほぼ同額です。それとは別に陝西省中国歴史博物館旅行社が、私たちの実習旅行をアレンジをすることによって、旅行社としての儲けがあったと思われます。これは私の想像なのですが、旅行社の儲けも先方にとって若干の魅力だった様です。別の意味では、これも1つの経済的貢献になったと思うのですが。

中国咸陽市に着きまして、先方で用意してくれた遺跡は、陽陵の東4kmの陽陵邑でした。大変広い発掘現場で、その中の20m四方グリッド4つを掘ることになりました。それから邑だけを掘るのではおもしろくないだろうということで、陽陵陪葬区の漢墓2基も発掘実習のために用意されていました。邑の発掘現場では、市街地、建物跡などを掘り、瓦、磚、土器などおおくの遺物が出土しました。遺構・遺物とも大変おもしろく興味のある物がたくさん出土しまして、学生たちが受けた印象は非常に強かったように思われました。発掘実習における教育効果が非常に高かったという印象を持ちました。学生が初めて発掘を行う遺跡は良好な遺跡であることが必要であります。なかなか今の日本国内、ことに関東から北では良好な遺跡に出会えません。中国の遺構・遺物の豊富な遺跡で実習をやらせてもらえることは、大変ありがたいことだと思います。

さらに中国で発掘実習を行った結果の別の利点に、学生が個人旅行として中国の遺跡を見学できたことであります。発掘実習を現地集合、現地解散にしましたところ、殷墟の遺跡であるとか洛陽の遺跡を見て現地に入ってくる学生や、中国における語学研修を1ヶ月受け、その後発掘現場の咸陽に来た学生もいました。また、発掘終了後に北京や上海の博物館を見学して帰国する学生もでてきました。先ほど緒形先生の愛知大学における調査旅行のお話がありましたが、うちはあれほどしっかりしたことはやっていないのですが、

中国で発掘実習を行ったことによっていろいろな教育効果が上がったと私は思っております。

スライドをさっとお見せいたします。

これは最初に日本が保存修復事業を行ったトゥルファン交河故城の現地の状況です。

これは修復が終わったところですが、こちらは中国側で修復をやって、こちらは日本側で修復をしています。両者それぞれ状況が違います。ほとんど風化していた所を、泥煉瓦で修理しています。これは大寺院と呼ばれている交河古城の中心にある寺院です。

これは小寺院と呼ばれているストウパーで、以前の写真を見ますと、塔の両側の基壇が壊れているのがわかりますが、それを直し、このように歩道を煉瓦でつくっています。

次は含元殿で、これは修復以前。東西にそれぞれ楼閣があります。それから真ん中が正殿で、全体で210mほどありまして、広角レンズで撮影しても全体が入らないほど大きな基壇です。奈良の平城宮の大極殿も実は含元殿がモデルになっていると言われております。

航空写真で見るとこのようなことになります。この辺に蒋介石が掘った塹壕があります。含元殿を全面的に発掘したときの様子です。

これも発掘の様子です。基壇が一番下の磚積だけ残ってます。それから散水の磚敷も残ってます。しかし磚積の大部分は崩れ落ちています。

ここの基壇の磚積は2段しか残っていません。これは基礎の部分です。修復にあたっては、磚積から60cm前を出して、そこは散水になるんですが、その上に修復の磚積を積み上げました。唐代の磚をいろいろ研究しまして、唐代の磚に限りなく近い磚を焼いて、それを積み上げました。

このスライドは、遺跡の上に唐の時代に建っていたであろう含元殿の復元図です。7世紀に造営された含元殿はこの様な建物ですよとの意図でここに写しました。京都大学人文科学研究所の田中淡先生にこれをお見せすると叱られるかもしれませんが。竜尾道は東西に存在し、真ん中ではないのですが、この写真が参考図として一番わかりやすいと思いまし



修復終了後の交河故城（大寺院址）



唐大明宮含元殿の発掘調査（1996）

たのでお見せしております。幅は210mほどあります。基壇の高さは16～17mになると思いますが、高い基壇の上にこのような建物が建っていました。遣唐使たちがこの含元殿で活躍をしていたのです。

これは修復工事の様子です。

これも修復工事の途中の写真です。

完成途中の写真ですが、まだ完成はしてません。基壇の前面60cmほど前に磚を積み上げて、また上面では旧基壇の高さより30cmほど高くしております。

次は発掘実習の陽陵です。これは景帝の陽陵の墳丘で、こちらにあるのが南の土闕です。これは土闕の上に建物を復元した写真です。西安においでの方は飛行場から西安の市街に向かう時、必ず見えると思います。

陽陵の墳丘から東へ4kmの所に邑があります。この邑に関しては『漢書』の地理志などに記載があります。大変広い遺跡です。発掘実習では、20m四方のグリッドを4つもらいまして学生たちを入れました。

発掘現場に到着した時にはすでに中国側の調査団が表土を全部はいておいてくれました。すぐ移植ごてを持っての作業に入ることが出来ました。彼らは学生で、この人たちは地元の農民です。排土の運搬や荒掘りの協力をしてくれました。

これも、発掘実習の様子です。大量の遺物が出土しました。日本の遺跡では考えられないということで、学生たちの印象も非常に強かったようです。これも発掘実習の様子ですが、よい発掘実習になりました。

発掘実習のために漢墓も用意されていました。土洞墓と磚室墓が用意されていました。

宿舎のホテルで、会議室を無料で貸してくれました。その部屋で、夜はミーティングや発掘の打ち合わせをいろいろ行いました。

多少時間を超過しましたが、以上で終わらせていただきます。



修復工事中の含元殿基壇

コ メ ン ト

人文科学研究所助教授 岡村秀典

司会 どうもありがとうございました。

それではすぐにコメンテーターにコメントをつけていただきたいと思います。

コメンテーターは当研究所のやはり中国考古学がご専門の岡村助教授をお願いしており

ます。

岡村 私、昨日到北京から戻ったばかりで、ちょうど寒い風とともに日本に舞い戻ってまいりまして、風邪を引いております。お聞き苦しいかと思いますが、ご容赦ください。

今日は、飯島先生に、遺跡という人類共通の文化遺産、とりわけ日本の文化に密接に関連する中国の文化遺産を、日中の国際協力のもとでいかに保護し、そして研究していくのかという点について、第一線で貢献されてきた貴重な経験をもとにお話しいただきました。また、遺跡の共同調査、あるいは研究、あるいは教育といった面についても、陽陵の研究を題材にお話しいただきました。

少し我田引水になって申し訳ないのですが、いまお話しがありましたように、私ども人文科学研究所の田中淡さん、中国建築史が専門でありますけれども、同じようにユネスコの復元修復事業に専門委員として参画されておりますし、考古学を専門とする私自身も中国の研究機関と共同で遺跡の発掘調査を行ってまいりました。あるいはまた、中国から留学生を受け入れて、日本の大学院生と一緒に実際に中国の遺跡の発掘を含めたフィールド調査を実施してまいりました。ただ、私が受け持っておりました大学院生は3人と少なく、日本人の2人はすでに大学などの研究機関に就職してしまいましたし、中国の留学生も博士論文を出したばかりでありまして、もうすぐ学生がいなくなるんですけれども、そういうふうに教育の面でもある程度の貢献を行ってきたわけであります。

しかしながら、今日のお話の柱は、1つは文化遺産の保護ということがあります。それから研究というのがもう1つの柱ですし、もう1つが教育ということ、その3つの大きな柱があるかと思いますが、この3つの柱は、21世紀の東方学においてますます重要になっていくであろうと考えます。

しかし、これにはやはりさまざまな問題がございます。たとえば文化財の保存修復には莫大な経費がかかるわけでありまして、こういった事業は、ユネスコや日本政府といったような恒久的な行政のシステムが必要になるわけでありまして、私ども研究者は、それに適切なアドバイスを行うという立場になるかと思っております。ですから、まず行政的な事業が先にあって、それに私どもが少し関与するという立場になりますから、大学や研究所の主体的な貢献はむずかしいと思っております。

一方、フィールドの調査あるいは研究という点に関しては、私なども、これまで科学研究費によって遺跡の発掘調査を中国の研究機関と共同で実施してまいりました。ただ、この科学研究費というのは大体2年ないしは3年という短期間の研究でありまして、大学あるいは研究所として組織的な、恒久的な取り組みができないわけでありまして、あるいはまた、その科学研究費によるフィールド調査というものは、考古学であるとか歴史学であるとか、そういった狭いディシプリンの中の調査がほとんどでありまして、学際的な、あるいは総合的な調査にはなっていないというのが、これまでのほとんどのフィールド調査の問題ではなかったかと思っております。

これまで、確かに日本のいくつかの大学で個別にそうしたフィールド調査が行われてまいりました。それは、考古学などの人文科学のほかに、たとえば自然科学でも、農学であるとか、あるいは形質人類学であるとか、あるいは金属器の分析というような分析科学の面で調査が行われてまいりました。そういった日本のそれぞれの大学で個別に行われている研究を、これからいかに総括していくのかということが必要になってくるでしょうし、教育という点に関しても、個別に行われている教育を、いかにこれから相互のネットワークを緊密にしていくなかで進めていくのが、必要になってくるんじゃないかと思います。そういったセンター、ないしは核となる、拠点となる組織づくりをこれから考えていかないといけないのではないかというのが、いま最も必要なことだろうと考えております。

以上で終わります。

司会 ありがとうございます。飯島先生に、ご自身のご体験に基づいて、中国の考古遺物の修復の問題と、それにかかわる考古学の教育に関するお話をちょうだいしました。その後で岡村先生に概略をうまくまとめていただいたと理解しております。実は、その次にお願いしておりますお話も、若干これと関連しないわけではない課題だと私は思っております。考古学が掘る話だとしますと、次のお話は掘って出てきたものの研究にかかわる話でありますから、これを一連のものと解釈いたしまして、まず次のお話をちょうだいいたしましてから、ご質問ご意見等があれば受け付けたいと考えております。大変申しわけございませんが、そのようにさせていただきますので、次に移らせていただきます。

出土文字資料に関する国際協力

人文科学研究所教授 富谷 至

司会 次は「出土文字資料に関する国際協力」という課題で、当研究所の富谷至教授にお話をいただきます。富谷先生は、ご専門は中国法制史、及び簡牘学、簡牘学というのは何ですかと、ご専門以外の方からはそういうご質問があるかと思いますが、要するに木簡ですね。日本でも木簡に字を書いた資料がたくさん出てきておりますけれども、中国では主として西北地域からたくさんそういうものが出てきております。近年はその種のものの発掘が相次いでおりまして、21世紀にはこの簡牘学が、中国の古い時代の研究にはかなり大きなウェイトを占めてくるようになるであろうと言われております。

この方面の研究について、富谷教授は、古い話ですが、19世紀の末から20世紀の初めにかけて、スウェーデンにスウェン・ヘディンという探検家がおりましたが、これが中央アジアに入りまして、何度か調査旅行をしたわけですが、そのときに持って帰った資料がかなり残っております。その資料についてスウェーデンと国際的な共同研究をされまして、実はつい最近もスウェーデン政府の主催でしょうか、大使館の主催でしょうか、東京でシンポジウムを開催されたという経験もお持ちで、かつ、中国とも簡牘学の方面で積極的に交流及び共同研究をしておいでです。

今日のお話は、そういったご経験を踏まえて、いくつかの問題点のご指摘もあると聞いております。

それではよろしく願いいたします。

富谷 富谷と申します。ただいまご紹介していただいたごとく、私は、1つは法制史、1つは簡牘学、これは実は古文書学とも関係するのですが、この2足のワラジをはいて研究を進めてきております。

今日の私の話は、大きく2つに分けてお話ししたいと思います。それは、前半は私がやってきたこと、それからこれからやろうとする計画に関しまして、若干ご紹介させていただきたい。後半は、それに関しまして、現在私が考えております、また問題と考えざるをえない点がございまして、そのことを申し上げて、大体10分と10分に分けてお話ししたいと思います。

なお、初めにお断りしておきたいことがございます。それは、本日の題は「国際協力」



となっておりますけれども、私の話で国際協力というのは、どちらかと言えば、国際共同研究を組織し、また、主催していくというつまり、国際共同研究という意味でこの言葉を使っていきたいと思っています。

さっそくですが、先ほど高田教授から少しお話がありましたように、11月19日、スウェーデンとの国際共同研究として、京都大学人文科学研究所とスウェーデン大使館と京都大学学術出版会の三者の共催で、シンポジウムを開催しました。スウェーデンとの共同研究において、スウェン・ヘディンという探検家が、ちょうど100年前、楼蘭という遺跡からいくつかの木簡、竹簡というものを発見いたしました。その百周年を記念する意味もありまして、ここ5～6年、スウェーデンのアカデミーと、ストックホルム大、それからストックホルムの民族学博物館と、我々人文研との間で共同研究を進めてきたわけなのです。その成果として今年出版したのが、この「流沙出土の文字資料」という本だったのですが、その出版を機に今度は、より広くこの成果を知っていただくという意味も込めてシンポジウムを開いたのです。これらについては、ある程度の効果をおさめたのではないかと、自負しております。

もう1つは、甘肅省に文物考古研究所という研究所がありまして、ここの共同研究といますか、共同調査というものも同時並行的に進めてまいりました。現在、敦煌一帯には漢代の遺跡がかなり残っておりまして、その漢代の遺跡の中から多くの木簡が出土してまいります。遺跡の調査も含めまして共同で調査し、また研究していくという試みを、数年前から進めつつあります。

今後ともそういった意味での研究ないしは共同研究を行なっていくつもりですけれども、当面私が進め、また計画し、計画にそって実行に移しつつあるものは、4つほどあります。

1つは、スウェーデンとの共同研究の英語版を出す予定であります。2002年、つまり来年の秋にスウェーデンから出版される予定でありまして、これは我々の仕事というよりもむしろ共同研究のパートナーであるスウェーデン側の仕事でございます。また、それが完成した後は、同じように今度はストックホルムの日本大使館でのシンポジウムも計画しています。これもまた我々は涼しい顔で、スウェーデン側のスタッフが計画し、そして予算をとってくればいいと、私は思っております、向こうに全てを任しているという段階でございます。

もう1つは河西回廊、つまり先ほど申しました甘肅省の文物研究所との共同調査についてです。河西回廊の考古調査の中で、1つのステーション、つまり、物を運んだり文書を往復させたりする駅というものですが、この駅伝の遺跡が発掘されており、そこから大量の木簡が出てきております。まず、10万分の1の地図と、NASA宇宙局が出しております衛星写真、これを合体させて立体図を作り、そしてその遺跡を浮かびあがらせていき、河西回廊の漢代の軍事施設ないしは伝達制度の研究を進めるというものです。これは予算の措置もすでにめどが立ちまして、来年の4月から着手していくつもりでございます。甘肅省の文物研究所のスタッフが2人と日本側の共同研究者が4人、合計6人の予定で2年

間にわたって進めていきます。

それと3番目の計画といたしましては、私のもう1つの研究テーマであります法制の問題です。「東アジアにおける死刑の諸問題」という題で、ヨーロッパと中国と韓国の学者を集めまして共同研究を主催し、そして成果を出していきたいと考えております。刑罰、特に死刑の問題は、今日的な東アジアの問題でもありまして、法制度と法思想とそれから法社会学の観点から、我々歴史を専門とする者だけではなくに、社会学の研究者、それから現代法の研究者も含めまして、今日の東アジアの死刑問題に関して、共同研究を行なう、これが第3番目の計画です。いま予算を申請しておりまして、通ればいいなと、願うばかりの段階でございます。

第4番目は、これも甘肅省の文物研究所との関わりなのですが、漢代の玉門関という関所が古代シルクロードの西の門戸としてございます。この玉門関の発掘調査を、将来的に進めていこう、ないしは進めないかというような声が、甘肅省文物研究所のほうからございました。ただ、私はこのことに関して、若干の躊躇があり、踏み切れないでおります。それが後半の話にもつながっていくところです。

国際共同研究と言いましたが、私としてはこのようなことは実はしたくない、できれば一人で、国内だけで、趣味的に研究していくのが一番楽なのです。研究を計画して、資金を調達して、共同研究者を組織し、研究を発表し、そしてしかるべき成果をあげていかなければならない。一連の「していかなければならない」ということはこれは当然のことですけれども、なかなか容易なことではないのです。しかしながら、私のおかれている立場だとか、それから職務としましては、やはり、給料分の仕事だと私は考えております。研究というものは、世界を相手にしていかなければならない。常にアピールしていかなければならない。こう私は考えております。あくまでも国際競争であるのですが、国際的に共同研究をしていかなければ、国際競争というものが逆に成り立たないと、私はそう思っております。したがって、世界を相手にしていくためには、これはどうしても必要だと自覚せねばなりません。

次に、先ほどからしばしば出ております問題ですが、教育の問題があると思います。若い研究者に国際的な場を提供して、そしてその中で、外国の学者と共同して研究していく、そういった場を提供することは、やはり先輩ないしは少し年齢と経験がある我々のこれも責務だと思っているのです。したがって、これからの若い人たちに研究の場を提供し、経験をしてもらうためには、こういった国際協力ないしは国際研究というものは、私はしていかなければならないし、すべきだと思っている。現在私が考えている、いくつかのプロジェクトはそういう目的で進めております。

ただ、その中でいくつか問題があります。それは、国際共同研究というものは、いったいどのように進めるべきなのか。また、あるべき国際共同研究というものは、どうしなければならないのかという問題です。特に、我々東方学研究部は、中国との国際協力ないしは共同研究というものを進める、これが何といたっても中心的なものとなると思います。そ

の場合に、私は共同研究というものは、共同のあり方に応じて、応分の権利とそして義務というものを有するものだし、また持たなければならないと思っているのです。そういう意味での国際的な共同研究というものが、中国との間で果たして十分な形でできるのかといえば、これは大変難しいと言わざるをえません。ズバリ言いまして、大多数の共同研究は、研究費用は日本側の全額負担という形で進んできましたが、今後は中国側にも私は応分の負担というものを要求してもいいのではないかと思うのです。「ユー・ギブ、アイ・ハブ」というこの関係は共同研究とは言えないし、また、長くは続かないと思います。

先ほど阪上所長がおっしゃったことですが、中国との国際研究が、国際共同の形で始まったのは1973年からであって、さらにもっと親密に進み出したのは1980年代からだと言えます。1980年代から現在まで、実はわずか20年しかたっていない。戦前の問題は少し別にいたしまして、20年しかたっていないのですが、ただしこの20年の間には、大きく中国と日本との関係が、国際的な関係、それから経済的な関係も変化しました。先ほど長尾総長は、中国の経済発展と大学の事情にふれられ、中国の大学は産学協同を積極的に進めると申されました。20年前の中日友好ということを旗印に始まった国際共同研究のあり方も、やはり変化したのだと私は思います。残念ながら日本はG7の中の最低のランクになってしまいました。片や中国は右肩上がりの経済成長を続けております。そういったなかで、20年前の共同研究の形というものは、やはり考え直さなければならない。

フィフティ・フィフティの研究費の負担、これは確かにまだ不可能かもしれませんが、そのことを強く言おうというつもりはございませんが、ただ、こと出土文物に関しまして、先ほどの高田教授の言葉を借りれば、出てきたものに対しての扱い方、もっと具体的に言えば、発見し、そして研究対象として、資料として取り扱い、そしてその資料を所有していく。所有というのは、その資料をどこが保管するのかという意味ではなしに、その知的所有権という問題ですが、たとえば報告書の報告だとか、図版の問題だとか、写真だとかいった問題に関しまして、共同研究から生じるあらゆる権利とかプライオリティだとかです。そういったものがいったいどこに属するのかという、このことに関しては、中国との間の共同のあり方は実に曖昧であるのです。特にそれが出土文字資料という、書かれた文字の問題に関しましては極めて偏向している。片務的なといいますか、偏った形になっていると言わざるをえません。少なくとも共同研究から得られる、もっと言えば、研究費を出した側が、それだけの権利とそこからの知的財産権というものを持っているのかと言いますと、決してそうではないというのが現状です。

やはり共同研究を進めるうえで、契約上、応分の負担とそれからその負担にともなう権利というものを、そして義務というものを、この際はっきり我々は主張して、始めるべきだと考えております。今までは、何となく、研究をさせてもらうんだとかいう、つまり研究の着手料として研究費を払ってきたと思いますが、あるべき共同研究というものを、この際、もう一度考え直すべきではないかと思うのです。日本は中国との共同研究において、応分の義務とそして権利を主張すべきである。これが私の言いたいことです。

そして、それが不可能であれば、またそれができない共同研究には、やはり十分な成果が期待できないのではないかと。そしてさらに言えば、合理的な契約とそれに基づく信約なくしては、本当の友好関係と共同研究のあり方というものは、成立しないのではないかと、私はそう考えておりますし、これからもそうしていきたいと思っております。

そのためには、じゃあどうしたらいいのかという問題が次にでてきます。今すぐこのことを進めていくには、いくつかの難しい問題があります。これからどうすればいいのか。それは共同研究を進めていく責任者の取り組み方、自覚の問題が、1つあると思っておりますし、また、さらには、そういった意味での連絡調整のシステム、機関というものもあればと私は願うのですけれども、これらについては今後の課題としたいと思っております。

以上です。

コ メ ン ト

佛教大学教授 杉本憲司

司会 どうもありがとうございました。大変困難な、しかしながら重要であり、かつ、将来的には徐々にではあれ解決していかなければならない問題だと思っております。そういう意味で大変重要な問題提起だったと思っております。この点については、さまざまなご意見等があり得るとは思いますが、とりあえず、コメンテーターにコメントをいただきまして、その後でご意見等をちょうだいしたいと考えております。

コメンテーターは仏教大学の杉本教授にお願いしてございますので、よろしく願いいたします。

杉本 杉本でございます。富谷先生の報告がございましたが、さすが、法制史研究をやっている先生でありますので、最後の辺で権利や義務や契約だとか、非常に難しい言葉が出てまいりました。私は、今日のコメンテーターの一人で隣りに座っておられます岡村先生をここ数年お手伝いをさせてもらいまして、中国での発掘に参加をしておりますし、それから別の研究機関から研究費をいただきまして、今年までに3年間、中国の現地調査をまいりました。そういうものを踏まえながら、いま富谷さんがおっしゃったような中国との共同研究というものが、どのように進められるのかということ、少し、私の感じた現状をお話しておきたいと思っております。

今もお話がございましたように、日中での学術研究協力を行ないます場合、ほとんどが研究費に関しましては日本側が負担をする。日本側が科研費をもらったり、あるいはその他の機関から研究費をもらいまして、中国側にそのお金を渡しまして、それで何日間、何人、こちらから現地へ調査に行きますということで、向こう側でアレンジをしてもらって入るといった形をとってきているわけでありまして。その場合、こちらから向こうへ参ります

交通費，中国国内での交通費，それから中国での宿泊費，食事費等々全部こちら持ちで，かつ，向こうの研究者の共同研究期間中の交通費から宿泊費，食事費まで，全部こちらが持つという形がほとんどの今までのやり方です。そういう形ですので，先ほども話がございましたように，こっちが全部費用を出すんだから，こっちにすべての権利があるという考え方が，出てくるのでありますが，そこが大変難しい問題であります。岡村さんと一緒にやりました河南省府域の発掘調の報告書でも，日本側の何人かは参加して発掘をいたしました但報告者の名前には中国側の名前しか出てこないものでありまして，その報告書の一番最後の所にわずか，「京都大学人文科学研究所の協力」という1行足らずの名前が出てくるだけです。実際，これが今までの現状です。

この状況をどのように今後していくのかは大変難しい問題であります。この要因として中国側に，長い間の日本の中国への帝国主義的な侵略の後遺症が，歴史として残っている点あげられます。以前の文化財に対します，悪く申しますと，泥棒的な，いいものだけ持って帰ってくるという長い間の出来事があります。これについて中国のほうはまだ記憶として充分持っていると思うのであります。そのために，私たちの調査に対しまして，フィフティ・フィフティの調査というのは，まだ暫く，向こうの対日本感に変化がない限り，少し難しいのではないかという気がいたします。

特に，今年まで3年間青海省という非常に奥地の調査をやってまいりまして感じたことがあります。今年は特にチベット寄りの3千～4千mの山地をジープに乗って踏査してきたのですが，大変田舎なので，泊まる所が非常に悪いんです。この踏査に案内についてくれました中国側の研究所の所長は，我々が泊まる宿屋を，一番安い所から探すんです。我々は，拠出した研究費に相応の宿舎を探してくださいと最初から契約をしてあったんですが，現実には一番安い所から探す。ちょっと調査に疲れてまいりましたので，私たちは少し不愉快になり文句を言いはじめたんですが，私たち側の即ち，研究者の側としては日本側に入っている中国人の研究者がおられまして，なぜこういうことが起こっているのかという裏話を少ししてくれました。

それはどういうことかと申しますと，我々が中国側と共同研究いたしまして，たとえば百万円なら百万円出しまして，よろしく，これこれの調査研究を行ないましょうという話をいたします。そうすると，中国側に渡した百万円の金を，中国側が自由に案配して使うわけでございますが，その百万円すべてを我々の調査に使ってくれるのではなくて，実はその内の何%かはある種の手数料としてどこかにいくのです。だから，協力してくれる研究所として使えるのは，百万円の内六，七十万円ぐらいでありまして，三十万ぐらいはどこかにいってるのです。これが中国のしきたりだという話です。これはその地域の問題ではなく，どこへ行っても同じ状況であるとのこと。「だから，文句を言わんといてください。言ったらついている中国の人がかわいそうです」と，その中国人の研究者がおっしゃるのです。どこへ手数料的な金が行くのか知りませんが，それで潤う人たちが何人かいるわけです。こういう現状の中で，中国との調査は，しばらくはどうも続きそ

うだという感じを私はしております。

それからもう2つほどありますが、先ほどの話にありました様に中国での出土木簡を、我々は富谷先生たちと、勉強しているのですが、その時、中国から木簡の写真が出版されますと、我々はその写真を使いまして解読をしていくということをするのですが、その写真が出版されるまで大変な時間がかかるわけでありまして。それじゃあ我々が向こうへ行って、博物館などに保管をしている木簡の現物を見せてくれるかと言いますと、これがまた大変難しいのです。これは外国人だから難しいのではなさそうでした、私は、ここ数年中国秦漢史研究会という学会に毎回出席をしております。ちょうど私が、日本の秦漢史研究会の会長をしておったものですから、挨拶を兼ねて毎回行ってたんですが、そのときに、木簡の部会がありますと、必ず中国の研究者が、「おまえとこの博物館、おれには見せてくれない。なぜ我々研究者が行くのに見せてくれないんだ」とか、「あの原稿を早く出版してくれ。まだ金庫にしまったままなのか」と、中国国内でも発掘をした当事者及びそれをいま研究している研究者が、全部おさえているといいましょうか、見せない。公開をしない。報告を出さない。もう10何年来放ったらかしの報告がたくさんありまして、少しずつ簡報という形で出るので、よけい我々はフラストレーションになってしまうのでありますが、これは日本人だけの問題ではなくて、中国全体の学界の問題がどうもあるのではないかと思います。

それからもう1つ、富谷先生がこれからされます甘肅省の河西回廊の調査ですが、この調査には地図を使う予定になっているのですけれども、この地図がまた中国の正確な地図が使えないという問題があります。現在、衛星写真はリアルタイムで買えるわけでありまして、それさえ手に入れば、中国の地図がなくてもわかるんですが、非常に細かい所になりますとやはり地図が必要です。聞くところによりますと、5万分の1の地図がどうも中国にはあるようですが、それも外国人には絶対見せてくれません。10万分の1の地図がありまして、ロシアが製作しました10万分の1の中国の地図は、日本では岐阜県立の図書館に全部ありますので、それはコピーで我々見ることができるようであります。このロシア作の地図と、先ほど言った衛星とを、あわせて地図を作って、これで甘肅の河西回廊の調査をするということになるわけでありまして。地図の問題は、政治上、軍事上で微妙な問題をはらんでおり、地図を利用したの十二分の成果を期待することは仲々難しいと言わざるを得ないのです。

以上のようにいろいろな問題がありますので、富谷先生がおっしゃいますような対等な立場で共同の調査をやるというのは、相当覚悟を決めて、中国側を説得して、おまえたちも経済力が一人前になったんだから、これからは対等に負担をして、共同研究・調査をやるよと持っていきより方法がないと思います。今後はいろいろな問題は解決の方向へ行くのだろうと思いますけれども、ここ暫くは富谷流のやり方では大変難しいという感じがいたします。

司会 どうもありがとうございました。だいぶ時間がたちまして、休憩を入れたいところなんですけど、大変辛辣なと言いますか、中国に対する注文という色彩が濃くなってまいりまして、異議あるいは意見を、この場で今すぐには言っておきたいという方がございましたら、その点についてだけ受け付けたいと思いますが、いかがでしょうか。それはちょっと違うよというふうなご意見がございましたら、公平のために受け付けておきたいと思いますが。

勝村 別に異議というほどではないですけども、ちょっと違う意見を申しますと、確かに中国との研究費の問題は非常に難しい問題だと思います。少し学術振興会（JSPS）と関係した者として申しますと、たとえば韓国との間も非常に難しい問題がありました。やっとなら、とにかく百年かかってやっと韓国と日本の学術体制が、去年から今年にかけてできたわけで、日本学術振興会とコーセフという自然科学を中心としたところとの関係ができたうえに、KRF という人文社会との関係のある所とが、これもかなりの決断で、前の文部次官をしていた佐藤さんが学振の理事長になられたのが契機だと思いますが、向こうの理事長と、それも北京で会われて、話げできた。人文社会科学の中における国際協力がどのようにしてできるかというのは、たとえば日本では学術振興会レベルですと協議が進んでいるわけですが、特にアジアの関係が大事であるということはあるんですが、残念ながら、中国との間にはそうした関係がまだできてないんです。中国と日本との中における学術体制というものができていないところに、1つの問題があるわけです。

韓国のことで申しますと、一昨年、初めて人文社会の各レベルにおける協力関係を何とかしようというので、私も少し努力しまして、長尾先生からも物心両面の支援をいただきまして、それでやっとなら京都大学と韓国の国立国語研究院というものの名を出して、これも初めてできた関係。2回目も、学振が援助して、KRF が援助して、やっとならできた。そこから初めて協力が出てきたんですけども、そのときにとった方式は、2国間だけではギクシャクする可能性があるんで、2国間の中にほかを入れよう、中国が入ったりアメリカを入れたりマレーシアを入れたりしまして、そうして2国間を軸にしなごら、多国間の中から2国間を考ていくというよなことをやっとなら、お金もそれぞれが持ち合ごう。この場合は完璧にフィフティ・フィフティでいくということにしました。これは、かなりハードネゴシエーションだったんですけども、参加したところは完璧に五分五分。そうなごらきますと日本のほうがつらい立場におかれたんですけども、何とか克服しました。同じ問題をシステムとして中国との間でもつくらなければならぬということになっています。

ただ、ご承知のよなごら中国の場合は、先行する関係が非常に複雑で多岐にわたっています。研究所と北京大学とか北京図書館とか、あるいは京都大学と復旦大学であるとかいうふうな、個々のケースが先行してありまして、それがかなり根づいてありますので、学術体制全体のレベルとして、こういっとなら問題を中国との間で構築するといっとなら、まだその時期に非常に残念ながらない。これはシステムの問題であるといっとなら思います。

だから、先ほどのお話の中にも、特に杉本さんの話の中にシステムに触れられる部分があったと思いますが、両国の中でのシステムというものがここできちんとつくられるような兆しは出てきているということだと、あるいはシステムをつくらない以上これはできないし、その点においては、人文研は大変貢献ができるのではないかということを感じておりまして、その点でも、私も及ばずながら森先生などにもお願いをしている最中であるわけで、いずれそういうようなことが、システムとしてつくられ、フィフティ・フィフティの関係がつくられることを願っています。

それからもう1つ、地図の問題ですが、軍事的に非常に難しい問題のあるこういう地図でも、中国人が入って、まず日本在住の中国人などを介してやる。これは先ほどの二国間の中におけるさらにちょっとした多国間の問題が入るんですけども、そういう形を介すればできるかもしれない。ただ、問題は、国際協力だけではなくて、国内協力の問題があるかと思います。先ほど日韓のことを申しましたが、日韓の後、何でちっぽけな島根県立大学でやるんだというような手紙が、私のごく身近な人から学振のほうへ行ったりしておりまして、「こんなものが来てるよ」「やあ、困ったなあ」と、国内協力の難しさということが私はあるような気がします。

司会 なかなかいろいろ難しい問題があろうかと思いますが、実は予定しておりました時間をすでに過ぎております。しかしながら、前回、第一回目、京大会館でやりましたときには、制限時間がありまして、追い出される予定でしたので、総合討論なしに解散という事態になったわけですが、幸いここは時間がいくらでも長く引き延ばせますので、ご異議がなければ、こういうふうにさせていただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。

暫く休憩を入れます。その後で今日は、4人の先生方にお話をちょうだいしたわけですが、全体を含めて、フロア、それからパネリストの先生方、すべてまだ言い足りないとか、補充したいというようなご意見もございませうし、あるいはフロアのほうからは、是非ともこの点は聞いておきたいということもあると思いますので、そういった意味で、できれば、あまり長くは時間をとるつもりはございませんが、二、三十分ちょっと、討論の時間を設けたいと考えております。

それでは15分再開をお願いいたします。

総括討論

司会 人文科学研究所漢字情報研究センター主任 高田時雄

(再開)

司会 きょうは第2回目のシンポジウムといたしまして、4人の先生方にお話いただいたわけですが、最初に勝村先生に「漢字情報学と国際協力」という課題のお話をいただきました。漢字情報学というのは、なかなかこれからの展開にいろいろな問題があるわけです。第1回のシンポジウムの時に佐藤先生がおっしゃったんですが、漢字に関するコンピューターまわりの問題というのは、欧



米の、つまりアルファベット系の文字をつかっている諸国から比べると、著しく立ち遅れていて、この問題を緊急かつ真剣に考えなおさないと、我々漢字をつかっている諸民族、諸国家は文明の危機に瀕する可能性があるというふうなご提言もありました。

我々東方学に関わる、もっとも漢字に近いところで仕事をしている人間にとっては、この問題はやはりないがしろにはできないというふうに考えています。どのようにしてこれを発展させていくべきかということ議論していただかねばならないのですけれども、なかなか短時日では解決できない問題でもありますし、かつ実体が先行しておりますから、我々はなるべく一番的確な、適正な有り様というのを模索していくことしかありえないわけですが、常にその一方で、理論的な意味づけということを考えていかなければならないだろうと思います。

それから現代中国に関わる問題、我々の研究所は一貫して古い中国とその文化というものを研究してきたわけですが、総長のお話にもありましたように、現代中国の諸問題というのが、どうしても避けて通れないような状況にたちいたっているわけで、そういった現代中国の新しい動向に即応するような体制というものも考えていかなければならないということだと思います。

それから、これは我々のオーソドックスな研究の対象であったし、今でもある古代中国の文化に直接関わる、考古学でありますとか、あるいは文献学でありますとか、そういった研究対象との関わりの問題、そしてその研究対象、もちろんそれ自体は多くの場合中国にあるわけですから、研究対象としてそれをどのように分かちあっていくかという問題が

国際協力とからんで出てくるわけです。もちろん共同で取り扱えるようなシステムを構築していく必要があるのですが、そのためにいろいろな具体的な問題を解決していかなければならないということだろうと思います。

きょうはそういった問題について、いろんな問題の提起に留まる部分もあろうかと思えますけれども、できるかぎりそういった問題の存在と、それからそういった問題のもつ意味合いというふうなものを考えるきっかけになればいいというふうに考えているわけで、ぜひともご在席の先生方にご発言をいただき、今後の課題にしたいと考えております。

それともうひとつは、せっかくなきゃパネリストとしてきていただいている先生方、それからコメンテーターの先生方も含めまして、言い足りない点は補充していただきたいと思えます。どうぞご自由に挙手していただいて、所属とお名前を言ってご発言いただければ幸いです。

発言（柴生芳） 柴生芳と申します。中国の甘肅省から神戸大学に留学しています。いま5年目ですけれども、ずっと富谷先生の研究班に毎週参加させていただきました。支えていただきまして本当にありがとうございました。

先ほど富谷先生と杉本先生のお話を聞いて、いまの日本の先生方の中国との共同研究について、あるいは国際協力の一環として、中日の関係についてお話がありましたけれども、確かに日本の先生の悩みがよく理解できました。私も4年過ぎましたけれども、いろいろ先生のご意見も改めて聞くことができました。例えば、先ほど杉本先生のおっしゃったとおり、中国との共同研究の時の費用の使い方とか、また共同研究の費用、100%日本負担とか、それは確かにいまそのほうが多くて、100%とはいえないですけれども、90%以上がその形になっております。

私、今年甘肅省に短い間戻っていたんですけれども、甘肅省は今年秋田県の教育委員会と10年間の共同研究の契約を結びまして、その共同研究の形はちょっと変わっています。毎年秋田県から2人の考古学系の先生が甘肅省にいらっやって、ケアは全部甘肅省。中国滞在中の費用は全部中国が出す形で、甘肅省博物館と甘肅省の考古学研究所から1人ずつ毎年秋田に行きます。日本滞在のケアは日本側が出す。そういう形に一応なっております。それは多分、これからのひとつの方法ではないかと思っていますけれども、もともと日本側が100%の費用をだすのは、確かに中国の国情があったのでしょうか。

先ほど杉本先生もおっしゃったとおり、15年前は中国の普通の1ヶ月の給与は日本円の800円ぐらいです。1ヶ月の給料が800円では、日本にきて生活はなかなかできないのではないかと考えています。いまは、私の1ヶ月の給料は中国に戻ったら2万円ぐらい。15年前より大分増えてきましたけれども、日本の平均20万円の給料とまったく平等になるのは確かにすごく難しいと思います。

先ほど富谷先生がおっしゃったとおり、フィフティ・フィフティになるのは、ひとつの方法として私は大賛成しています。しかしながらすぐにそうなるのは多分難しいと思いま

す。従っていまは当面、甘肅省と秋田県の交流のような方法もいいではないかと考えています。

これから私も、富谷先生のシルクロード河西回廊のプロジェクトの一人として参加させていただきまして、いろいろ調査を進めてまいります。私は来年4月に甘肅省に戻りますから、先生の先ほどのご意見も考えて、日本側、日本の先生にはこんな意見があると向こうに伝えたいと思います。以上です。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。確かにそういうシステムづくりというのはたいへん有効に働く部分はあるかと思えます。秋田県だけでなく、色々なところでそういう関係ができればいいし、できれば大学間のような、あるいは研究所間のような形で、なるべくフィフティ・フィフティに近いような形での協同というのが、今後築けるようになればいいというふうに思います。

それに関連して、なにかご意見ありましたら。かつまたほかの諸問題に関してでも結構ですが、なにかほかにご意見等ございますでしょうか。

発言(今井吉郎) 市民でございますが、無職のもので、前は公務員をしておりました。まったくの素人でございます。素人の立場で伺いますと、いま両先生のお話でございますが、どうも研究者の先生方は国家と国家の関係を、非常に親密に、なにか兄弟か親子の間みたいに中国と日本の関係をお考えになっているような感じを受けるわけですね。中国の文化財、あるいは埋蔵物というのは、やはり向こうの大きな資産と思えます。しかも日本の文化は大体中世ごろまでは中国の文化の影響を受けている。文化の源流を訪ねることであり協力してくれる向こうの先生方の人件費も、全部こちらがもってもいいのではないのでしょうか。

あるいは、中国では国家の指導者と申しまししょうか、現実論の政治家の方々はそういうふうに考えるんじゃないのでしょうか。しかし学問研究の国際性からは、全部こちらから出さなきゃならんというのはおかしいんじゃないか。発見したひとつの文化的な知恵というものの所有権が、果してこちらが行なってすべての費用を出してしたんだからということで、優先権があるかということについては別問題で、また向こうは向こうで言い分があるんじゃないかというような気がいたします。

それから、極端に言えば、西洋のアリストテレスなんかの認識論と、インドや中国のアジア古代思想の違いがあるのではないのでしょうか。そういうことから考えましても、いま司会の先生がおっしゃった知的対象物を共同研究をしていくという時に、中国の文化財の発掘調査によって得られる文化的な知性というものが、果して、調査して認識するにおいて、費用を出したほうのすべてのものになるんだということは、やはり学問の上からいきましても、中国の思想からみてちょっと、違うんじゃないかという気がしました。

司会 ありがとうございます。納税者側のご意見として、大変深く承りたいと思います。これは富谷先生、あるいは杉本先生、簡単にお答えいただけますでしょうか。

富谷 ちょっとご質問の趣旨、内容が私にはわからないところがあったのですが、どうしましょう。そういうご意見として承っておきますということにさせていただきたいと存じます。

発言(今井吉郎) 両国はそういう学問の愛という認識にたって、お互いを知るということが大切です。この考え方は、仏教の、まさに本流でございますけれども、愛をもって知識を得る。より具体的には、いわゆる慈であります。それはお互い協力し、研究していくべきことじゃないかと私は思います。だから、先生方はそのことを前提に、研究者としての態度というものを考えてはどうかということをお願いしているのです。

司会 責任のある回答をお願いします(笑)。まあなかなか難しい問題があると思いますので、早急にはなかなか解決はつかないんですが、もちろん中国側に存在するものについては、こちらは謙虚に見せていただくという姿勢は当然ながら持たなければいけないと思います。ただ共同研究という別の場ですね、そういうところではお互いの負担分というふうなもの、やはり相応に考えていかなければならないというふうなことだろうと思いますが、ほかになにかご質問はございますか。

発言(岡本さえ) 今年東洋文化研究所をやめました岡本と申します。ひとつだけお教えいただきたいことがあるんですけども、つい最近なんですけど、たてつづけに3つの国の先生から、日本のどこにアクセスすれば、日本の東方学の全体、総合的な情報が得られるかという質問を受けました。書目ですと、高田先生がいまいろいろご苦労なさっている漢籍データベースのこともありますし、例えば学情センターからは中国書システムがまもなくできると思いますし、東洋文庫でもホームページを開いていて、東洋文庫で出版された書名、タイトルは見られたりします。

ただそれは各書目でなく、もっとテキストとしてダウンロードできるというふうに、あるいは日本の東方学の全体を、とりあえずそこを見ればわかるよというような、そういうことを求めているということがわかりました。メルボルンの大学の先生、それからフランスの中国文献書誌をつくっている社会科学高等研究院のかた、それからアメリカの先生からも聞かれましたので、もしそういうことを、特に国際協力なさっている先生方から一言教えていただければ、私はこれから返事をする時に助かると思います。よろしく願いいたします。

司会 これはどなたにお答えいただくのがいいのでしょうか。私の偏見でよければ、少し

発言させていただきます。日本の学界はそういうふうなものを必要としているし、いま岡本先生が言われたように、諸外国でも日本のそういった文献の所在、それから研究の状況について、集約的に、そこにアクセスすればすべてがわかるというふうな場を求めているということは、私も理解しております。ただそれを実現するためには、学会組織や広範な研究者、さらには一般の人々の支援と理解が必要だと思っんですね。それがなければ、現状では個々の研究者のボランティア的な努力に頼っているようなことで、経費の面でもかなり難しい状況にあると思います。先ほど岡本先生が言われたように、現在私どものセンターでは、全国漢籍データベースというものをやりはじめました。何年かたてば、かなり実用的なものが構築できるのであろうと思っていますけれども、それは文献の公開についての側面にとどまっています。

もうひとつは、日本の東洋学、あるいは中国学の研究の動向ですね。中国風にいうと「研究動態」というものに対する、集約された情報の場というのがやはり必要だろうと思っていますし、国際的な企画もなくてはならないようです。これは中国ではありませんが、台湾の漢学研究中心というのがあります。そこが中心になって、いまは中国学の研究動向を紹介する雑誌をだしているわけですが、その雑誌とは別に、世界の中国学の年鑑を出したいということを計画しておられるようです。その年鑑というのは冊子になった書物のスタイルのもの、それからそれとは別に、速報性のあるネット上のホームページ。そういったものをやりたいので、日本のしかるべき機関がそれを日本の部分について請け負ってくれないかという提言がありました。私は人文科学研究所の漢字情報研究センターでよければ、協力するのにやぶさかではないとまでは答えてありますが、その後どうなるか、まだわかりませんが、できるかぎりそういった面についても、努力していきたいと考えております。どなたか補足していただけることがあればお願いいたします。

森 文献については、いま高田さんがおっしゃったとおりです。それから研究者のデータベースに関しましては、皆さんご存じのとおり、学術情報研究所が研究者のデータベースをつくっておりますから、そこで東洋学なり中国学なりで検索すれば、それにちゃんと回答を寄せている研究者については、大体ヒットするでしょう。

もうひとつ私が最近聞いておりますところでは、中国のほうでも、北京の中国社会科学院に、日本風に訳せば、情報科学研究所というのがあります。その何培忠という先生が、世界中の中国学者のデータベースをつくる作業をすでにはじめておられます。日本人の研究者につきましても、いろいろ手立てを尽くして、そのデータベースの情報を収集する作業をしておられるところですので、皆さんのもとに、その方からの依頼がまいましたら、ぜひ情報を提供してあげてください。そうすれば、世界的な規模のデータベース作成に協力できるかと思っんです。

司会 ほか、どなたかご意見ございますか。

発言(小野和子) 元人文研におりました小野和子です。さきほど市民の方から発言がございましたが、富谷先生も、いろいろご経験なさることがあって、そのようなご発言になった、と思います。先生も文化遺産に対する愛情ゆえに、発掘されたものが私物化され、学問の発展が阻害されることがあってはならない、とお考えになっているのでしょうか。

研究経費のフィフティ・フィフティの問題については、私もそのような問題にぶつかりますが、これはなかなか難しい、経済格差というものが存在する限り、難しいのではないかと、思っています。杉本先生のお話を聞くと、少し痛ましい気持ちになりますが、そうであればこそ日本と中国の間に経済格差がなくなってほしい、と強く思いますし、そしてその日はおそらくそれほど遠くはないのではないかと、最近思っています。

またシステムとして中間搾取の問題があるのは事実でしょうが、貪官などの官僚の問題は、最近、中国でも大きく問題になっていますし、外国からそれを何とかするわけにも参りませんので、中国自身の体制のなかで解決していってもらわねばならない問題だ、と思います。中国の学者たちも国際交流に加わっていくなかで共同研究における学界のルールを身につけていかれるでしょうし、交流を深めていくなかで何年かかかって解決していくことができれば、と思います。多少感じたことを申し述べました。

司会 ありがとうございます。いかがでしょうか、ほかに何か。

飯島 文物の共同研究と共同調査に関連して、日本と中国間の経済格差の問題がいくつか話題になってきました。日本が一方的にお金を出して、中国側は何もしていないとの印象を持つことも多いように思います。しかし遺跡保存のほうで申しますと、ユネスコがお金を拠出して、実質的には日本政府が基金を拠出していることもあって、それでは中国政府は遺跡保護の上で何をするのかということ常々強く問いかけております。

含元殿でいえば、含元殿遺跡の基壇部分はユネスコの基金で保存修復を行いますが、その周辺部の大明宮全体に対しての植林とか付属陳列館の建設は、中国側がお金をだして完成させることになっています。また、遺跡の土地をどれだけ買い上げるかというような問題も、それ相応に中国側が努力しています。日中間に経済的な問題があるから、すべて日本の金をあてにしているということはないと思われれます。

それからもうひとつ、経済格差の問題だけで言うのなら、調査費を得れば、中国側としては、その資料を外国の研究者とフィフティ・フィフティで研究をして発表しても別に問題はないはずで、現にロシアやベトナム等では、フィフティ・フィフティ的な関係で研究ができるとも聞いております。詳しいことはわかりませんが、考古学者仲間から、ロシアやベトナムでは、中国ほど厳しい状態ではないという話をよく聞いております。中国が外国人の考古学的な調査研究に対して神経質になるのは、中国の方々の文化、文物に対する思いが、私たちの理解を越えるものとしてあるような気がいたします。文物を外国にもって行って展覧会をやればお金が入るとか、共同で研究をすれば科学研究費の一部が中

国に入るといふ経済的効果の上だけで文物を見ているわけではなく、文物は自分たちのものであるという非常に強い思いがあるように思われます。そしてことにファーストハンドとしての研究は、はっきり申し上げて外国人にやってもらいたくない。国家文物局の考えとしては、共同調査をあまり好ましいと思っていないとのことを、この夏の発掘実習で耳にいたしました。共同研究はよいが発掘を伴う共同調査は原則として多くを認めないとの情報です。

では、私たちが行っている発掘実習は認められるのかと陝西省考古研究所や北京大学に聞いたところ、これは共同調査ではない、実習の場を与えているにすぎないとの答えが返ってきました。あるいは大学間の協定に基づいて行う仕事だから問題は少ないとの答えが返ってきました。実習や大学間の交流協定に基づく調査に関して、国家文物局のほうに説明している、という話も聞きました。中国が、文物の研究や保存に振り向ける金銭的な余裕が十分でないという単なる経済的な問題だけでなく、中国の方々が文化財や文物を国の宝として大切にしたいという思いと価値観は、私たち日本人の価値観を越えたものがあるという気がいたします。

司会 ありがとうございます。ぼちぼち時間かなという気がしておりますが、どうしてもこれだけは言っておきたいという方がございましたら。はい。弁解（笑）？

富谷 いえ御礼です。私が提案いたしましたことにつき、いろいろ考えていただきまして感謝いたします。ただ一言、言いたかったのはこういうことだったんです。いまずぐ確かに私もフィフティ・フィフティなんていうことを望んでいるわけではないのです。ただし日本側の研究者が共同研究というものに取り組んでいく上で、我々はどうしてもいかなければならないのかということをもう一度よく考えていかなければならない。そしてそれが真の意味での協力的な研究成果を上げるものだと。少なくとも税金を使うかぎりは考えていかなければならない。そういうことを言いたかったんです。

勝村 最初に漢字情報学というのが、このテーマ、与えられたものだと申しましたけれども、実は私が言いたかったのは、情報漢字学というものでなければならぬのではないかと考えておまして、ですから漢字処理というか、お手伝いするというか、そういうことでずっと広がってきた仕事、インフォメーションプロセッシングからの脱却がやっぱり必要で、漢字側からの、あるいは東洋学からの問題提起を、東洋学の中で解決する時期がきたんだろうなということ、先ほど言いたかったんです。

司会 それではそろそろ時間としますので、これで終わらせていただきたいと思います。きょうは土曜日というお休みの日にもかかわらず、かつまた大変寒い一日でありましたけれども、たくさんの方々にお運びいただき、「東方学と国際協力」というテーマで、活

発な議論を展開していただきました。ありがとうございました。

きょうのご発言は、前回同様、すべて報告書にいたしまして、公開したいと考えております。このシンポジウムは3月にまだ3回目がありますので、それにご参加いただければ、その時に配布されるということでございます。ぜひとも3回目もきていただいて、きょうの発言をいま一度冊子で確かめていただきたいと思います。

第3回目は、また場所がもとに戻りまして、京大会館で行います。3月16日、やはり土曜日ですが、13時から16時という予定でやりたいというふうに考えています。第3回目のテーマは「東方学の再構築」です。第1回、第2回の討論を踏まえて、21世紀の東方学というのは、どのようにして再構築すべきか、またどうすればそれが可能かという事柄を皆さんと話し合っていきたい思います。それを通してなにか新しい道筋が見えてくれば幸いと考えております。

きょうはどうもありがとうございました。長尾総長にもご臨席いただきまして、4人の先生方にも貴重なお話を伺うことができました。たいへんありがとうございました。在席の皆さんもどうもありがとうございました。御礼を申し上げます。(拍手)

